



東海道名所圖會

三

ル 3  
3496  
3





藤原師長公配所 櫻田

○鳴海

芭蕉翁千鳥家

名産有松絞

知立神社

沈裡附馬市

狭投神社

矢橋橋

小豆阪

山中里

○御油

免足神社

豊川

同安文庫

鳴海上聖

今川義元塚

八橋古蹟

矢刺岩

○岡寄

二村山

宮地山

本坂城

山本勘次故居

牛頭天王

笠寺

鳴海寺

衣比浦

燧川

橋雲寺

修瑠璃娘墳

大樹寺

衣乃里

法藏寺

二見道

砥鹿神社

○吉田

煙巖山

星寄

鳴海神社

音聞山

○沈鯉射

無量寺

矢刺川

大屋川

○藤川

○赤阪

御津神社

○吉田

煙巖山

鳳來寺

天神祠

籠樓

牛鼻

塚川

夕見坂

女谷

濱名川

源右山

引佐細江

若林二堂

引馬野

犀ヶ崖

本堂 三層塔

神祖御宮 鏡堂

一王行 名跡題石

石卷神社

猿馬場

富士見松

風爐井

濱名橋蹟

○荒井

今切

馬郡觀音

鴨江寺

五社明神

龍禪寺

鶴守梅理

八幡宮

二王子

窟觀音

○白須賀

高師山

角避彦神社

○荒井

今切

馬郡觀音

鴨江寺

五社明神

龍禪寺

伊勢兩宮

荒神祠

妙法石

○二川

白菅凌

橋本

紅葉寺

猪鼻嶽神社

館山寺

音求松

濱松

三方原

颯々松

辨財堂

人師堂

奥如石

馬背

○二川

白菅凌

橋本

紅葉寺

猪鼻嶽神社

館山寺

音求松

濱松

三方原

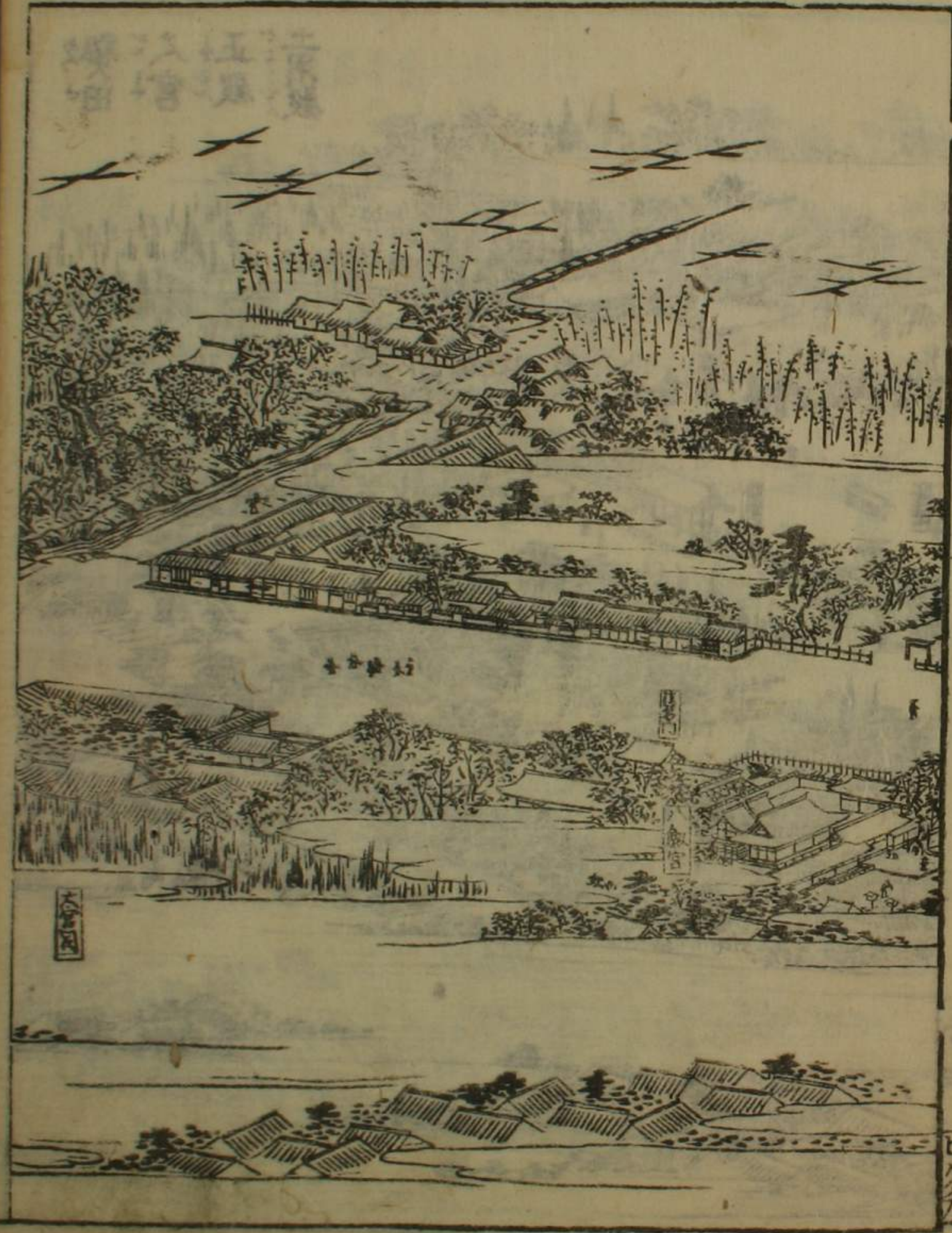
颯々松



官驛  
淡香居

東海道名所圖會卷之三目錄終

頭陀寺	植松原	蒲神明	茅場
京江戸行經同里	天竜川	沈田岩	熊野古蹟
朝顔墓	中泉	八幡宮	櫻池
今之浦	見附	三香登橋	金札鶴
熊登洞	袋井	妙星寺	名産花菱
腹川春川	志呂波磯		



御田  
八敷宮  
御新  
末社  
末社

出帳山繪高河



御田  
大宮  
正殿  
土用殿









寶田神社 同所あり神名帳云御田神社 祭神保食命 推産靈命

南新宮 大福田社の少あり祭神天照右神 素盞高尊 側小飯盛孫五命祠あり

青倉神社 南面石高橋れあり神名帳云青倉神社 社の後より名泉あり

鈴御前社 傳馬町あり 祭神天細女命

末社 右八百萬神祠。編者祠。王若祠。赫祠。淡園祠。楠沖前祠。 乙子祠。今宮。已上大宮の西の方よりあり

左八百萬神祠。二名新宮。賀茂祠。龍田祠。内天神祠。已上 大宮の東の方よりあり

一之沖若祠。土神祠。山神祠。自神祠。金神祠。龍神祠。 清水祠。所井祠。已上大宮の南の方よりあり

姉子祠。今宮祠。水向祠。素盞鳥祠。日長祠。已上海藏門 の外神幸道あり

山王祠。姉子祠。今宮祠。水向祠。素盞鳥祠。日長祠。已上 海藏門の外東側あり

外天神祠。德皇門の外より白倉祠。新水上祠。天岩戸事相の 乙宮の神三丁新あり。松姫祠。布曝女町あり

其外末社所より多あり。畷之

駒を老くまみくろん子早振名あり此社の下庭 春議雅経

十六夜日記

尤日尾法園ありとくつふもまやとつよはぬるればありとれ

宮へまひりて取らりてて書は多くも

祈りたよあをまふとつ備うのこくほも神の徳に 万佛

尾法園の園焚田のまふよりぬ神垣ありちちのまをまひりて拜

なふ本まや一ぬりまぬ森の本其より夕日ひきまひりて

風ふれれまひりておまふれく神さひりてまひりて

救もまふ本まよまぬらまぬらのはまひりてまひりて

まひりまにまひりまひりてまひりてまひりて

尊あり初て出雲の園ふ宮儀り有り八雲たのむら

果よりまひりまひりて其後景行天合弄所代まのみにあふ

のりまひりまひりて又い宮に本神のまひりてまひりて

日本武尊より夷とたひりて啼りぬふ附勢田ふまひりて

一條院に時大江正平といふ侍士ありなり長保の末ふあて當園は

ひりたりなるふ大般若とまふく此宮にて供養とまひりて

願文に吾願まてふみちぬ任限又こちたり古々一帰らんとするゆ  
もいひくさるるべし書つるすつたあそれよあはれほとく安ぬ

もいひくさるるべし書つるすつたあそれよあはれほとく安ぬ

古語拾遺云草薙神劍者尤是天皇自日本武尊  
體旋之年留在此尾張國熱田社外賊偷逃不能  
出敬而久代關如不倫其禮所遣幣之日可同  
元集云草薙劍此今在尾張國吾湯市村私云  
東鑑曰連久元是即契田祝部所掌之神是也  
尤七日御祭齊今奉幣熱田社當社依為外戚  
神皇正統紀云中心之崇敬云云

日本武尊也信濃より尾張不出る所の國小宮貴媛と云女を尾張の  
稻種之宿禰妹之女とめりて淹留せしむりあつて八十菅の  
荒神おと安(本)多は劍を宮貴媛乃弟小と老く徒より  
まま山神化して小蛇となりて河道小横たたり尊又まてさのひふ  
山神毒氣と吐るふ神をえされたりとまたり伊勢よりつりぬふ能慶

野と云あつて御病をるひひくさるるべし書つるすつたあそれよあはれほとく安ぬ  
まれよと奏して終ふれぬゆゆ年二十より天皇さまひて  
怒しこのふ事限り群々百寮をもて伊勢國能慶野小たさ  
なまられし小白とるりて大倭國に於て彈琴原小留れり其  
又陵と能らられし又飛ぐら肉の古市にさまる其和陵と定め  
しうど又飛く天小登りぬ依るこの陵ありぬの草薙の劍の宮貴  
媛わが光なり尾張小とまたりゆふ  
足利義教公富士見下向の時釋堯孝紀  
熱田の宮乃神奈小まよりて河道まがら小祈りるを侍りむ  
日本武尊東夷征伐れる小あひのさうひふ教さのひひ耐とたり道  
伊勢大神宮小して大和姫命に酒よりゆひひ小令けさつゆひひ  
志劍えし神殿小止りせさるるまはるるやいんことるる神明  
鎮護國家れちうひもまのひひくさるるべし書つるすつたあそれよあはれほとく安ぬ  
るかちれりあつてこれ神皇正統紀云云

あつま聖の系葉なるに秋の表きて表代もきりて

君のたれ老せぬる有りといひらるや遠が海ありせん

按れ當社の入皇十二代の帝景行天皇は所時より所鎮座しゆ殿后

天智天皇の所宇故有る皇都遷りなる十九年迄居て天武天皇朱鳥

元年小再びと此所遷座しゆ其初勅使例祭小立ゆて宮幣と奉らせ

ぬ事其餘凡今あり中古奉幣使急りゆると忌部廣成されと嘆て古語拾

遺小書より先社頭の歳多事ハ八境小朱代居大宮八剱神社源をま乃

社と初め按社末社れ教く石は高橋下馬のち南面の内を海蔵門といひあ

神幸道は内門の内より不實梅肉の天神祠あり里表より着庵の玄宗皇帝四百

餘州と治先は日本公取んとて計ゆると當社の所神志る一りして仮小揚貴地

と現れ世と乱りゆゆれと日本と事叶り貴地馬嵬が亦高力士

が為小空一りくさせらるる靈別れとあり方士揚通幽といふ者ハ四方つる

して魂魄と尋られ小日本蓬萊山小島にまゝ居て當社小乃本あり

一といふ則は内天神の揚貴地は靈氣多しといふ事古く世人は小膽をま

社説の聞え傳は然られと仙傳拾遺と引く曉風集もいふ事と載り

又東海瓊華集の秦徐市始皇の詔と奉て不成れ茶衣求る日本(波)に

熟田神祠され蓬萊宮と記一壹和信正熟田に巫小綱福と聞詔と奉て

維摩會具講師と依惟蓮沙門亡母骨と高野山小藏老人を東國より登り以

神祠小立ある神人灰骨の汚穢と云う宿昔の漸門外小草度ハ其夜神宮小爰

は生ありて神助小從ひ惟蓮と環察りたるこれ至孝と神明の賞ゆふる又新

羅國の沙門通行の草薙は寶劍の靈威を聞て神殿小入續經一百日一為く

竊小寶劍以盜取の僧伽梨小褻と携持して筑紫小至り本國小歸り時

忽小海風暴起して浪に漂ひ去る事公卿を俄に黒雲一帯して劍を奪て

元の如く神祠小藏む又治承の比は政大原師長公平相團れ居りて

さきく(か)小時當宮小治一琵琶小彈りゆを明神感應ゆりて寶殿

震動ゆりり一平平家物語ゆ載りゆりゆ小靈威應驗奉て負て之

ツバノ神殿は和太。渡殿。物殿。祭文殿。回廊。拜殿。勅使殿。透牆。左右の  
樂所。神樂所。神樂舎。神庫。橋部屋。社頭。小石。大燈燼あり。銘曰  
藝田木神宮。神寶。前奉。奇進。石燈籠。寛永七庚午。拾正月。佐久間之膳  
亮平勝之。鑄。其高。丈餘。蓋の巨。五尺。許。本師東山南禪寺。小同銘の  
大燈燼なり。あれ。一變の大器也。  
西。鎮。皇門。東。春。敵。門。外。の。御。厩。の。神。馬。の。繫。り。神馬の尾。陽庚  
より。賦せしむる也。  
其。外。政。所。御。饌。殿。大。茶。師。堂。の。當。社。神。宮。寺。也。本尊。小。茶。師。併。女。也。此  
藝田神の本地併也。  
側。小。不。勅。堂。の。八。劍。の。神。也。本。地。に。在。り。又。其。側。小。愛。深。寺。あり。大。宮。の。後。と。云。見。之。と  
い。ふ。に。神。井。の。傳。あり。垂。井。里。れ。古。迹。小。玉。は。井。あり。を。わ。り。に。松。岡。獨。あり  
乾。の。方。小。鷲。尊。山。あり。土。人。斷。ま。山。是。蓋。茶。山。に。舊。蹟。の。如。き。あり。松。山。とい。ふ  
宗。祇。乃。方。角。抄。也。凡。く。て。り。我。あ。不。同。所。前。の。中。に。あり。西。の。方。小。白。を。山。あり  
され。日本。武。尊。の。陵。の。草。浦。比。の。旗。綾。町。あり。浦。冠。者。乾。頼。頼。頼。れ。り。所。也  
故。小。浦。比。等。あり。頼。朝。の。も。ま。り。て。出。陣。の。所。母。の。熱。田。の。大。宮。司。の。女。と  
諸。書。に。い。ふ。に。り。所。也。町。中。は。森。法。名。門。宗。法。界。の。眞。洞。の。近。東。門。外。に。云

本。松。あり。高。藏。社。の。側。小。鉾。取。洞。水。神。洞。新。宮。あり。は。社。頭。に。石。と。携。り。旗  
立。も。小。恙。あり。油。路。の。倍。して。返。り。なる。風。俗。も。梓。南。社。と。熱。田。と。跡。も。幸  
い。草。薙。寶。劍。と。乘。れ。枝。小。恙。並。あり。後。々。光。あり。側。の。杉。の。梢。も。光。燃。上。り。く  
其。下。に。田。小。燒。倒。れ。田。も。熱。り。なる。社。の。名。も。呼。ぶ。と。又。御。神。傳。小  
玉。葉。  
檜。花。あり。の。ん。の。あ。れ。が。見。あ。れ。ね。小。の。り。る。友。と。そ。の。ま。ん  
あれ。藝。田。大。師。神。此。神。宮。と。も。ん。長。り。かの。社。は。大。宮。司。尾。張。姓。代。々。身。を。ま。り  
る。小。尾。張。負。藏。の。女。の。名。と。松。と。り。なる。藤。系。季。兼。小。志。と。り。く。り。り。く  
季。範。派。の。り。る。後。大。神。が。く。詫。宣。せ。ま。勢。あり。なる。あり。季。範。初。て。大。宮  
司。小。願。其。末。今。小。た。な。む。と。も。ん。玉。葉。集。め。し。く。り。る。これ。む。り。も。今。も。示。現。利  
生。に。垂。迹。小。恙。ま。り。と。り。て。一。心。再。振。れ。傳。傳。小。頭。と。傾。れ。る。春。の。花。れ。白。ひ  
鮮。も。ご。ご。秋。の。月。れ。清。風。小。澄。り。り。の。音。神。樂。此。身。傍。人。の。法。晴。を  
た。ら。ば。間。斷。あり。神。燈。の。社。の。後。小。懸。と。四。時。の。櫻。葉。息。ら。ん。是。み。る  
平。天。下。に。御。掃。蕪。あり。て。東。海。東。山。道。身。一。の。並。社。と。も。り。れ。る。



大宮八坂宮  
 三月十日  
 五月十日  
 六月十日  
 七月十日  
 八月十日  
 九月十日  
 十月十日  
 十一月十日  
 十二月十日  
 正月十日  
 二月十日  
 三月十日  
 四月十日  
 五月十日  
 六月十日  
 七月十日  
 八月十日  
 九月十日  
 十月十日  
 十一月十日  
 十二月十日



正月十一日  
 踏歌神事

浪花春泉齋画

豊田宮年中祭事

○正月元旦丑剋

大宮 八劔宮 大宮司奉幣

○同日朝

内院供御

八劔宮小社に於て大宮に至る内院外院の儀毎年の如く、二月御報祭十一月新嘗祭は三祭の大宮より行はせ八劔宮儀も此儀御進の中、いそ樂あり祝所祝詞有て御女神樂奏は、是樂祝詞神樂毎事定れる事、右儀にて内外の儀あり社中一統の仕仕これ大宮に於ける也

○同日未剋

外院供御

八劔宮より行はせ大宮に至る儀あり同日神事改定の儀式多し一畧之

○同日晩

上千竈神社小社あり

二日晩

八劔宮の行ひ

三日晩 松崎宮の行ひ

○同日晩

日割宮の行ひ

五日晩

南新宮の行ひ

これ八劔宮の行ひに其儀法男女の難形と儀(縁狀)など

○二日朝

外院供御

大宮司奉幣の儀あり

○五日朝

外院供御

上千竈神の宮儀に於て初市の遺風あり寅の林より社中至心の事、津福屋より群奉進祝の種々の儀あり是儀も御事也

○同日晩

大福田宮

陪從十人歩て十一日踏歌の親あり十日まで毎夕あり

○七日朝

外院供御

大宮司奉幣の儀あり

○同日晩

大福田宮

合水の儀あり前年正月十二日豊小水とあて水の儀あり大宮正殿の下ふ埋と並く今以豊小水持来り本水今年の豊小水討りあり

○十日朝

踏歌神事

大福田社より始て大宮 八劔宮 又大福田社より神事(舞)人十二人高巾子(舞)人、笛(舞)人、陪從十人、海蔵門の儀あり、持つ次(翁)あり、大宮司出仕(奉幣)あり、至る大宮司出仕(奉幣)あり

○十四日朝

歩射試

六人の射角の儀あり射の儀あり之は、三十一日、二十六日也

○十五日朝

外院供御

海蔵門の儀あり

○同日朝

歩射的

六人の射角の儀あり射の儀あり大宮司祝師之老等出仕あり、規式(射)あり、射場の儀あり、海蔵門の儀あり、石橋(射)の儀あり

○九日朝

兩宮歩射會

社中會合して明年の神役を定め、飲酒の礼あり、歩射の儀あり、他法(故)あり

○二月初巳午未日

祈年祭

初巳日夜亥剋大宮大儀所(大)右小儀とめて棚と傍り東西大小神祇と祭の儀あり、御進儀あり

○同日未剋

高蔵宮

日割宮 大福田宮 氷上宮 保志支神

○同日未剋

其外諸社供御

聖日(撤)之

○同日未剋

八劔宮大儀所

聖日(撤)之

○同日未剋

八劔宮大儀所

聖日(撤)之

○同日未剋

其外諸社供御

聖日(撤)之

○同日未剋

八劔宮大儀所

聖日(撤)之

御田神社 御田神社 御田神社  
 二月 初日 二日 三日 初日 初日  
 鳥喰 神事



○二月初十日午刻

御田神社供御

鳥喰の事 俗に鳥喰といふは神事なり  
 鳥喰は長外小主人平餅とて鳥とては餅は鳥喰の喰とて  
 餅餠一侍りて次は東西六社合て十二社の家次よりまひ祭といふ  
 年次祭の時令順なるべしとて己の夜は供御より未の日御田の  
 至るまで故実多し口傳りりとて

○三月二日朝

八劔宮内院供所

草餅 桃花神酒

○同

大宮内院供所

草餅 桃花神酒

○四月八日神事

外院供所

兩宮例の如し

○五月朔日朝

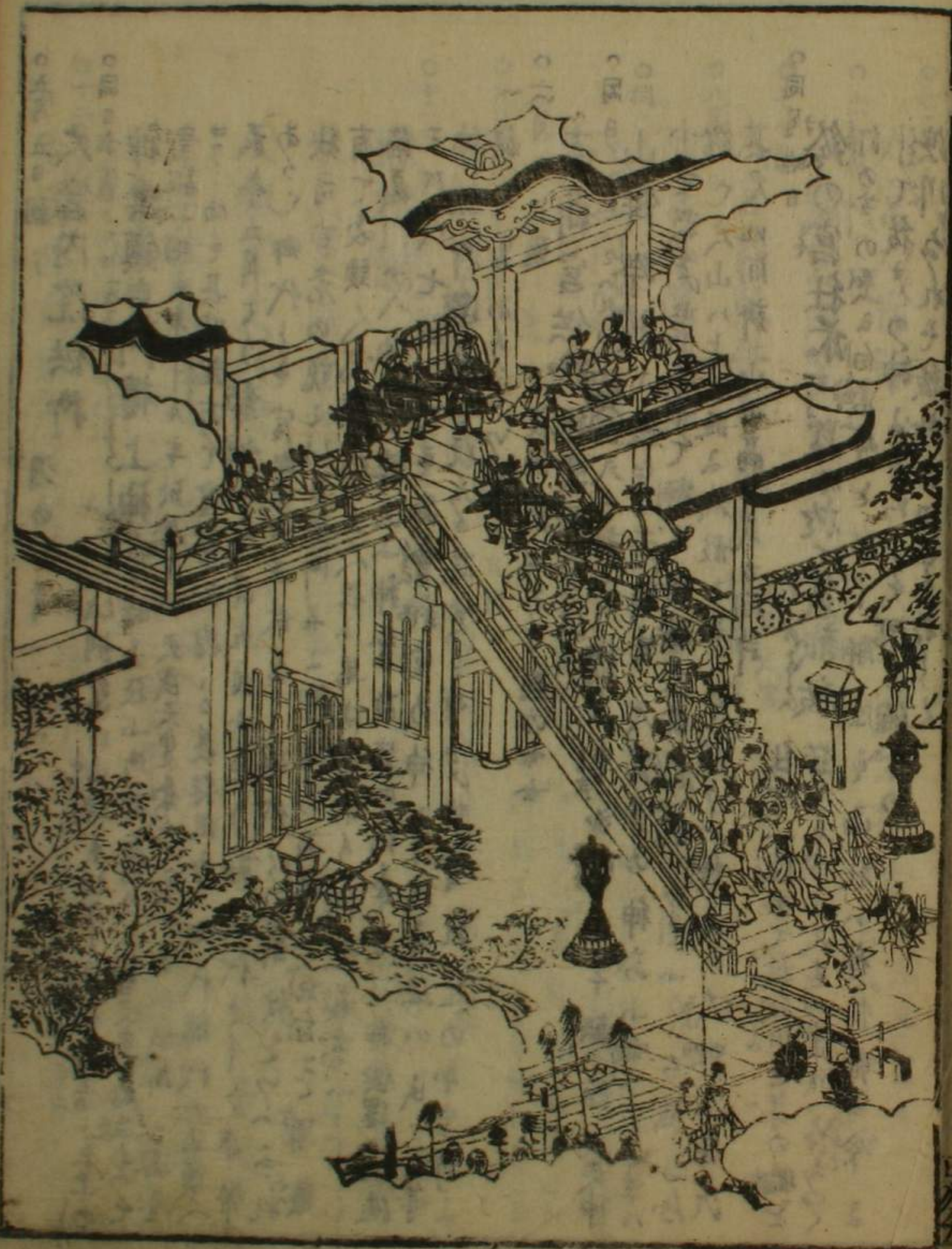
八劔宮内院供所

翌日撤之 諸社小菅蒲と青

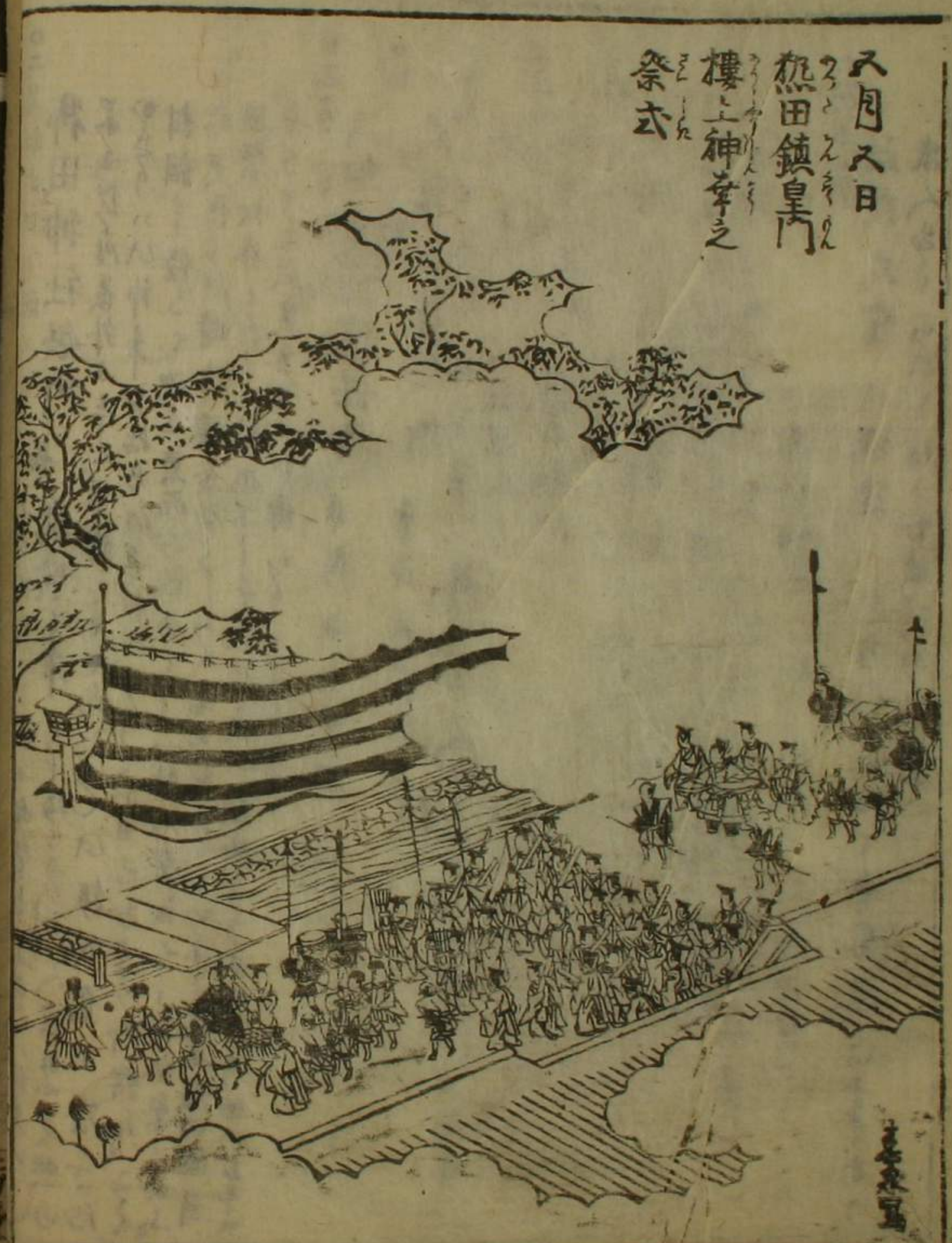
○同日夜

政所大宮 八劔宮

源左主神 氷上宮・大福田宮  
 七日午奉 卿代頭人補代頭人七社小幸幣あり  
 七社とて所謂 大宮 八劔宮 高藏宮 日割宮  
 衆人歩くされとはとむ故実ありとて



八月八日  
熱田鎮皇門  
樓上神幸之  
祭云





○五月五日朝

大宮内院供御

例の如し

○同日未朝

神樂鎮皇門樓上御幸

此例の由緒をむしり景行天皇四十三年の  
時高社小所鎮座より天智天皇の時改めりて  
皇都に至りて其時五十年辰巳の天武天皇御  
幸し其時辰巳の宮幣を賜ひ其終風を御代補  
代の御頭人  
元年五月より製幣して五月に至り勅使代  
ありし御代より官幣の正使あり補代あり  
社司古老の裁に日依所并御補の御頭人  
有て支頭人馬頭人の三人若馬場兼あり行  
海藏門入神樂の樓上御幸改定の御幸多し  
三人七社に依り會館の御幸も尾張の氏人等  
神樂所遷座と依り故定より會館の御幸別  
秘文字ありと云ふ

○六月五日朝

南新宮供御

夜師夜洞あり懸の女

○同日未朝

山鉾祭禮

八劍宮南新宮大宮等の神山鉾源左文神  
小寺教多装束して御幸大鼓御鼓  
其尺四間新山の高サ八九間許

○同月晦日

鈴の宮社系川原不於て夏秋後

社中一統少て秋後を其の輪と  
鈴の宮の系川原不於て夏秋後  
其の系川原不於て夏秋後  
其の系川原不於て夏秋後

○七月二日

大宮大掃除

○同四日

八劍宮大掃除

其外諸社共夜子出て  
されとつとむ

○六日朝

八劍宮内院供御

○七日朝

大宮内院供御

○八月朔日

兩宮外院供御

○同日未朝

大宮内院供御

○九月八日未の刻

八劍宮内院供御

○十一月朔日

新嘗祭

○同日未朝

氷上宮源太夫神

○同日未朝

八劍宮大供所

○十二月十五日

兩宮外院供所又煉餅

新嘗と云ふは神の御饗ひの儀なり  
二月十日の御饗ひの儀なり  
大宮外院供所又煉餅  
御補頭人丈宮籠所不寒中立春まで  
毎夜籠り製式あり





笠寺



或時為國守三の宮熱田明神小春訪りて其後神明法樂代為小琵琶彈朗  
 秘一のふ其所本末無智の境され情欲おれ者あり邑老村女漢人重更  
 頭欲低れ耳と從尊といふも更小清濁と分て呂律と知事ありされも胡巴  
 琴が彈せしる魚鱗躍進虞公歌と發せしる梁塵動揺くおれ妙と稱る  
 時より自然小感と催も理をれを諸人身の毛堅く函座赤異のふひとるも  
 術深更ふ及ん諸香調の内お花芬馥の氣込含こ流泉は曲の間お  
 月清明の光が争ふ願ひ今生世俗文字の業狂言結語の謬がゆりて  
 とし朗詠として秘曲と彈ゆひしを神明感應小堪まて寶殿大ふ  
 震動も平家の惡りありせむ今瑞相と争ねむしとせむと大屋  
 感涙とど流されたる  
 高市連 黒人  
 山風の音をききおろしきく田の苗代ありと花小せむはく  
 光明寺  
 入道  
 六帖  
 万葉  
 櫻田  
 東海道宮入り北海までゆるふ山寺村  
 戸部村あり其ふありと櫻村といふ

天林山笠覆寺

尾州星奇村登ち村あり

本尊十一面観音

開基若光上人徳長六尺

寺記云 山むし 聖武帝の御宇若光上人蓋本成感得し

鳴海

尾張郡鳴海町にあり

星奇 星奇ははとひ

星奇やあつたの漢火のはのもち

うらの日とくれふあつた

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

あつたあつたあつたの漢火ははれ

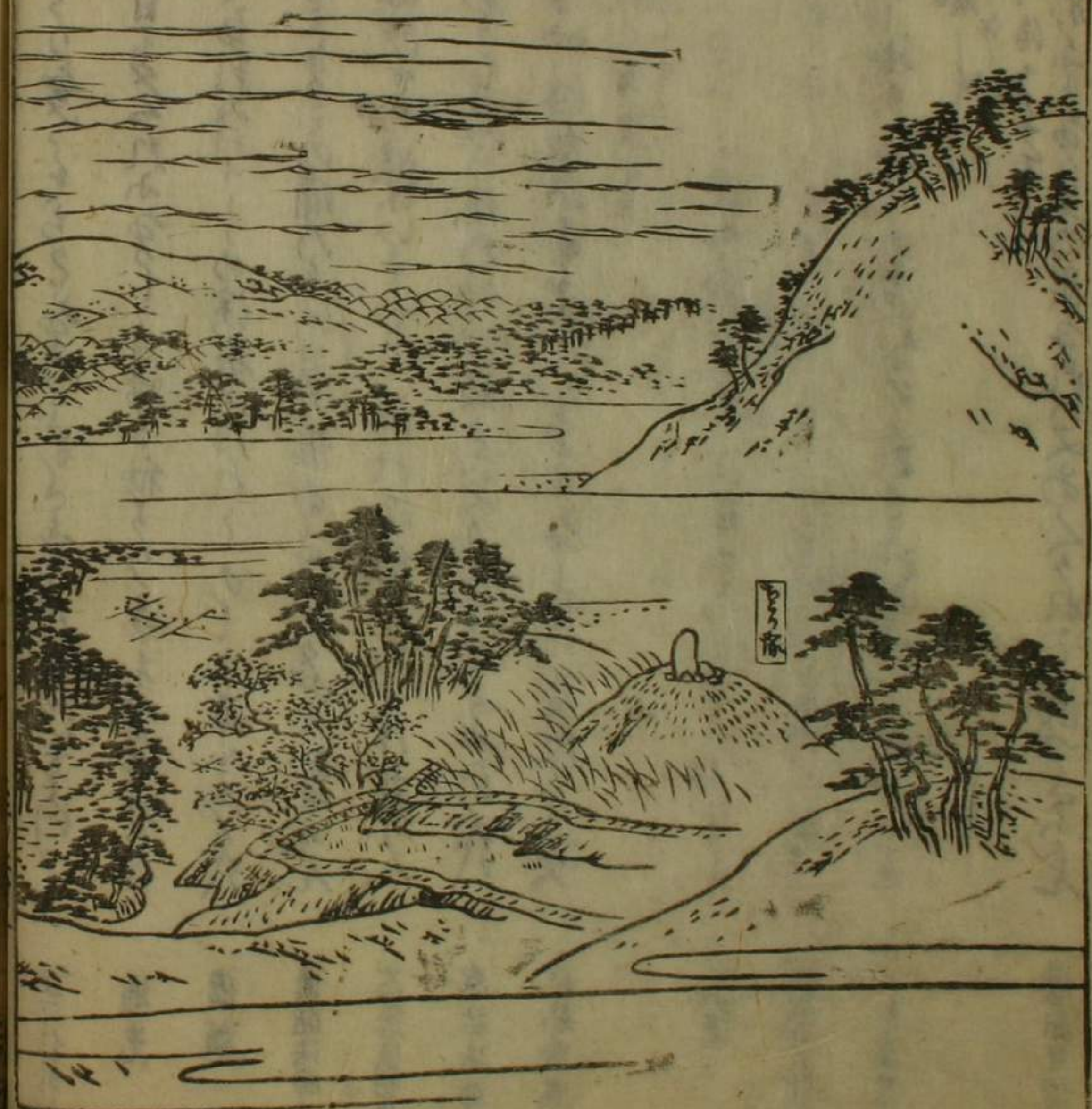
あつたあつたあつたの漢火ははれ

鳴海神社

尾州

ふるまゐ

本田通權の  
和舟の達人  
みして泰然  
と著るるの  
出陣されし  
尾州鳴海の  
碓氷坂通れ  
一時周の  
みか跡蹟れ  
其時通權  
古歩と喰む



遠く城

と鳴海の

漢子も

初年更夕の

みらひとは

あはれ浦軍二  
つゝ子達の  
舞の遠征は  
字好し安く  
と漢臣は  
たるく  
おれと  
文法  
お通の  
大將とや  
芭蕉翁の  
野原の  
ちりりの  
はちか  
あつらひ



鳴海神社 鳴海の生土神と一綱糸ハ六月二十日  
子名塚 芭蕉翁の句碑ニ山王山ナリ南ハ大洋殿ナリ  
汎奈の地ニ有テ中ノ代金氏ハ舊跡自画境の  
墨蹟と云云

徳覺の里 松尾此里ニハ信長ノ墓  
夜明ノ里 此ノ里ニハ信長ノ墓

衣の浦 波ありふ衣のり 此神貝取みきり風のりてみよ  
名考 西行法師

吉岡山 吉岡の山ありやちのりての社あり  
名考 祐奉

名産有松絞 有松村ニ有テ市街ニ有テ絞ノ人及ビ諸國  
今川義元塚 有松村ニ有テ今川義元ノ墓アリ

古松此山ニ有テあり今川上総女原義元ノ大軍ニ催テ尾州  
氏の建ッ所ニ有テあり古墳多ク又若江村ノ山中ニ人塚アリ  
我死の場といふ

信長記大意 頃々永祿三年五月駿州の太守今川上総女原義元ノ大軍ニ催テ尾州  
信長の城主織田信長と攻滅シ直ニ上洛ありて頻々風雲あり  
信長の江州代佐々木義秀ニ三ノ三百騎の援兵取テ所々此名軍將取  
こめて今川の上洛外遮テ中流鳴海ハ兩城ニ山只馬取弘家同半内弘高取  
番一不公替一今川内通一又又又寺の若武今川義季ハ八千  
軍參取海ニ有テ拒ミ早今川ノ先鋒ハ遠州井谷城主井伊信濃直教直  
小三遠の援兵至テ五月十二日大將義元ハ四万餘騎引率テ駿府立  
同十六日此裡掛小陣ニ有テ信長軍將佐ノ向テ山田若丸御防テ丸根  
外城と持テ守リ内松平若四郎正親高力新九郎直重又其外大勢  
討れたり同十九日此名根城と攻メ由テ向テ援兵ニ請テ將取  
鳴海の近々捕獲アリテ所々陣張申新九郎根城今川勢ニ圍ル

まきまきよー若くろろ折第信長の諸士と懇て酒宴く居あひ一早くま  
れと殺りぞんを弓矢取て何の給うあんを死馳向く義元と其二の合戦と  
遂罷軍門は晒まぶさとのとこく十九日午は希あまき熱田の方馬  
まき丸根城あまきいふ不雌雄は交言んとあれろ尾州軍勢休り追々  
此来り熱田の旗を口めて退付り信長熱田明神へ務一武弁肥後入道  
夕菴とて願書は書せ神前にて積上る其時明神は内陣を物具の音頻ふ  
圓かぬ信長信作膳ふ銘一今日の軍味方の勝利疑る一明神の加護  
ありとて諸軍と下知せられろまきり故味方は陣申此井に合戦始り火  
とちして攻取ふ信長は是も依り集ふ秋四島を封れろ酒の希ふ至て  
尾州方室長門も自意接合ふも今川の兵八百千人封れろとて  
終ふ不守も封れろまきりて依り子杖若室三人の首は桶狭間へ  
巻け義元をひく丸根警津は城攻め信長の軍將あまき封れり  
首途うーと收び桶狭間の山を合れ小ね来り惟義は構て酒宴を  
せられろ信長いよ城あまき中流お至く一戦を遂げんと宣ふ時北田

勝二家信輝林佐渡も秀物毛利新助秀詮宋田権六勝家も申んが  
故の天勢も味方不勢もてろ所思あめろ止れども信長あまき  
寺は東に閑道は怪く若昭寺の岩乃近き山谷お到り夜討の支急  
馬の響は緒せ士卒に胃と着る白布はのり一様不斬事とて行と  
向に進と答よし合をせと定り後入る義元の本陣を押あらし其折  
夕立頻ふ降て物言あまきりゆ後勢の勢の急あまきもあまきで中斷して  
居ろる不縁波とてのり揚あまき今川勢は小周章騒所はる前田大次代  
利勝本下雅樂助嘉季中川金屋門秀胤毛利河内也秀頼同新助秀詮  
佐久間与五郎枝盛あまきの首とり大将佐長お敵は築田出羽也謀  
山とめりて故陣の後追る泰三左衛門可成馬強る軍兵は百騎とて  
陣入る後横お斬りし大將とあまき封れろ義元も討策と巡じ  
今川勢は引包りて四方の天合るあまきり特天泥も一交あまき



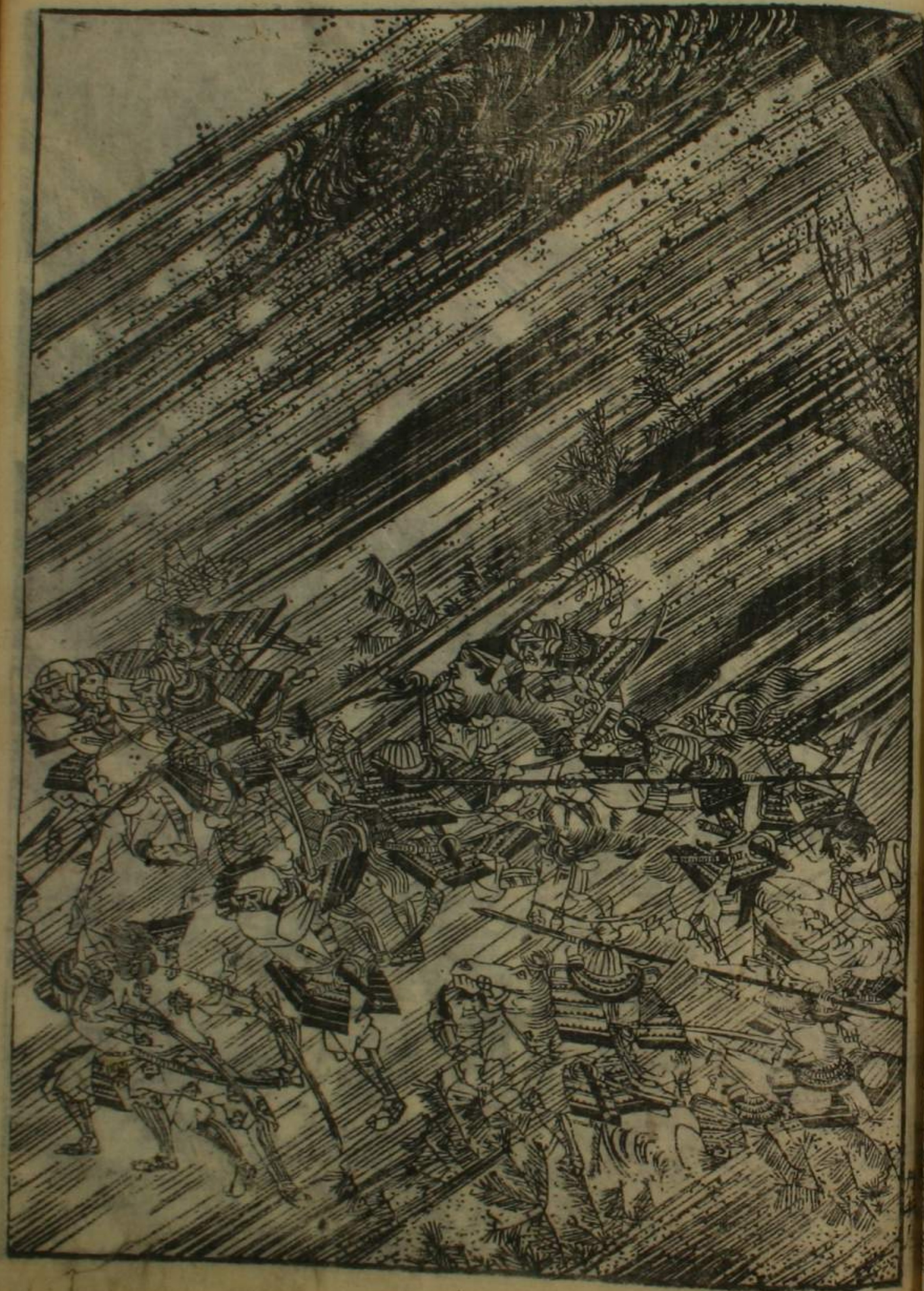
尾州有ね村の  
 名も細は海と  
 藍くふ條か  
 諸國へ入られと  
 へ店あふ多く  
 費入家  
 折くよあり



因云  
 近奉  
 寛聖元年  
 大坂を圍  
 りし所小  
 ま坪のり  
 あつし  
 病身ゆ  
 世をうや  
 困窮す  
 のひとい  
 の路を  
 の橋を  
 衣も度  
 持たか  
 父母を  
 打ひ  
 け病十五  
 村  
 官家の  
 市上園  
 向報  
 津波  
 賜



春泉齋



永祿五年五月十九日  
桶狭間夜戰

石田友訂寫



かく小相言葉... 今川方の... 戦の勢討れ... 今川義元の... 服部小平太... 代々相傳の山蛇... 今川義元の... 服部小平太... 代々相傳の山蛇... 今川義元の... 服部小平太... 代々相傳の山蛇...

風も古の... 石碑も... 文物の日星... 塚川... 塚川... 塚川...



池鯉鮒... 塚川... 塚川... 塚川...

知立神社... 祭神膏不合尊... 多宝塔... 知立神社... 祭神膏不合尊... 多宝塔...





五馬の除く  
 何となく  
 あらう

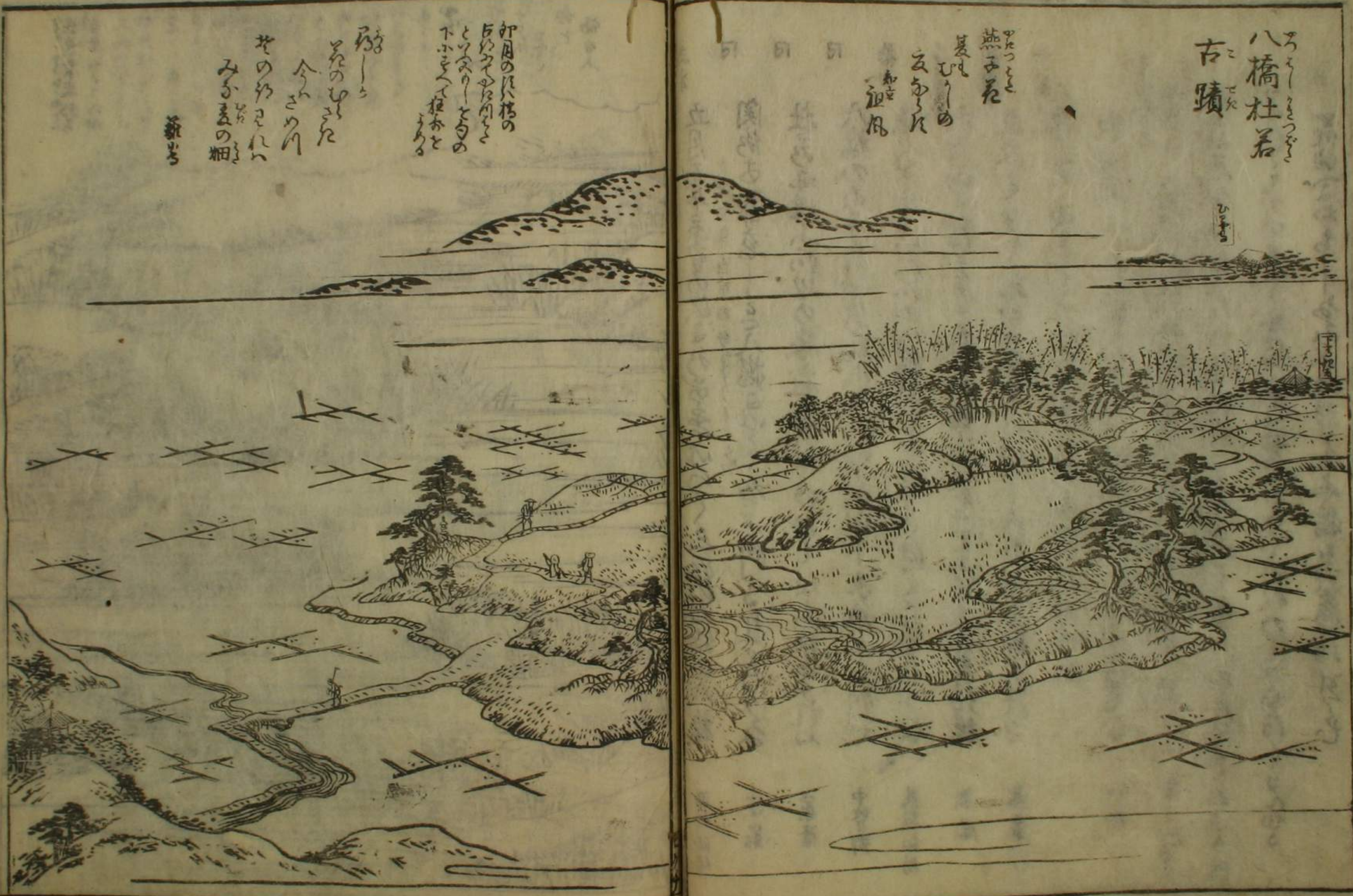


池裡駒驛  
 馬市ハ毎茶  
 四月五日より  
 終るテ十日の間  
 あり周禮曰  
 八尺已上ハ龍  
 七尺七寸ハ  
 六尺ハ馬と  
 五尺ハ駒と  
 云ふ



八橋杜若  
古蹟

燕  
夏  
云  
風



打田の  
下

今  
み





かくて三河國よりうね維裡謝馬場とて叔里の聖原とて二岐の橋を  
名付けて八橋といふ砂は睡る響響の夏瓜辞一去水小まそる杜あり  
時瓜違く開くう花はむり此色るうい咲ぬん橋もあつ橋あり  
姿をばううはらん相如げ世なううううの肥馬は兼く昇僊のつる  
幽子身瓜捨る窮も小類て南橋と依る八橋よ八橋とておあふ人首  
もささ之橋は橋はあられ朽ぬるむあく朽ぬるものも今も又ささ  
佐佐木もささ三河のつる瓜ん持さてもささつるも

送子 和赴三河

東方千騎下関門澤國江山雨後昏  
杜若橋邊春洲色知君駐馬問王孫

物茂卿

三河 八橋木

中郎遺跡 問荒村落日春陸野水昏  
燕也 不來花也 未葬燕愁絶奈王孫

六如菴

夫八橋燕子花の名不賞さる事い古今集及び伊勢物語より生  
たり中將は吾妻より瓜は物語小編集を原は書と古今説々多し

世小業平較は日記といひあるひ寛平の宿女伊勢物語の修二の諸冊は尊の  
みとのまくりひる男女物語といふ伊勢の二字小妹脊と畧訓し合り又修補は  
袋州紙の業平代他れもい自伝を論せん便小従ふ同士のわかれ棟云  
はる孫多しの系集はあ入ることを一説は齊宮の事と詮とまるは伊勢  
と号は和泉式部本の中齊宮の事と初し書りといふ如美の真淵の古をいふて  
伊勢の僻物語といふ説は一説は業平は日記といふ説も珍らん仁和の所門芥川  
の業平と書りあれ業平は後後事と服元喬在中將の論と著して其人の  
風流と行半といふはさる本と論ん 按ずるふの郷は風流と體おして古を  
吹きくは性音は歌達る文とばる孫語と嫵婉小基を後人豔文家の他あり  
必しも盡く在氏お出は或云二条家三代集傳授おもまは物語と初小傳し  
むくあり源氏物語の虚を實小書りけ物語の實と虚お作れ物語と僻業よ  
虚と實をさるゆへは感説多し実と實と虚と虚お見れは紛々事ありあれ  
伊勢物語と續口傳は業平御代一期の間は事と書りりりそれる古





夫船川  
の  
中  
と  
流  
と  
り  
幸  
高

大橋



夫船川橋

淨瑠璃姫墳

西矢別たの方面の中ありしりく大郡の宿北長谷路の  
北を流る浄瑠璃河原と云ふ今この地は浄瑠璃の跡なり又い里小  
判官五郎下りの所ありて神一美姉塚 日清東の山ありて  
は姫を愛しつゝとて

矢橋川

矢別里の東ありて源岐嶺山溪より流る末は磐塚川と  
豊川の二大河

三河之淵瀬物不落を提刺爾夜手湖下児波無爾

名居せそあつてのよののさうやを兵川の壱乃一むろ 行家

矢別橋

矢橋川ふ架は長千式百八間高欄頭巾金物橋杭七十柱  
東海才一の長橋なり

うたせわいはとてくれいと梓弓をひの橋ふとをそん 伴草元政

今いむ一建武の足利治部大輔尊氏謙倉おそく 天子の命に叛くは

新田左衛門督長貞和度使と蒙りてまににの西尾小陣を足利直義の

い川の東にゆく上下の瀬とて進軍し官軍馳合せて足利勢を伐

も怖れ殺ぶるうけの天運と云ふ新田伊豆の國府お滞り我勇

威不傲られ後縁の倅光却足利小義されぬる我勇情をれ梓弓合戦根元

直義姦倭邪お仕者なれば謙倉お密に殿を 天皇は御恨あつて足利

初てありたる尊氏新田お攻られて敗中謙倉お建長寺に今別

成て勝利は得ぬをとて来紀お入下り星霜累うて仍川の

悠々と流る西海は海風穏中て泰勅の諸侯の弓と袋やと威風

凜々ううこれに相如が檣柱の誓も多張子房の圮檣の

只五粉の虹とて架せし長橋といはけ所の事あり

西辰紀行 本森 建武 戦場 恩賜 旌旗 如日 色東 隅 雖得 失 棄 楡 羅山子



都々々

流し  
 流し屋の  
 日暮り  
 夕暮



岡崎の湯園都會の  
 地味く賈人多く  
 美のおたるはといへ  
 半かゝ仙方延壽の  
 良業おのりあらし  
 岡崎女希元とい奇  
 こも視へばきにゆ  
 不老の標こそも  
 みか張の風流もや

夕暮



ま本  
雑古

あつた二む山の名はト 佐和七先一のうみは也  
く我ふんしとてさうのちるあはれものなる二むうの山 石橋頼朝  
ちうはははあはれきとらあつたままこま本のれむ二村の山 平泰時朝臣

千歳

さ月をみ帰たむし使のやくさな書ふはさそをさるる 権中納言藤原

衣の里

岡寄のよあり舉母し書は今旅下とあり内藤侯領せられたの  
子載集経類のちるあはれきとらあつたままこま本のれむ二村の山  
徑ちうくあはれもの里小麻ゆなり二村山とそを化はれぬ 経類

百

直帰こま本んで四入ん橋花あはれもの里小白ふせりん 貞成

ま本

白ゆは喉とせられる卯の花や衣の里は備あそありなる 徳全寺

藤川

赤坂まで武里九町むりーいば辰川辰宇治川のひりり古縁あり  
惟うをむらまのたのむらあつてまや衣の里 徳全寺  
はさふふまはれと高野まといふ歳内ひりり他より  
すくもこま本んでまのういはせぬ

犯行

あはれむむりし宿の四りそむらさ白ふ花の辰川 津友  
辰河のちるあはれもの里小麻ゆなり二村山とそを化はれぬ 経類

山中里

辰川より里新東の農家よ白草條草の細ユにて賣し山田藤本村  
山中里 山中忠重の古城あり右の方里山は藤本八幡宮立ぬ

紀法

おほつるあまの山中の藤本村とそを化はれぬ 雅世

百

藤本村の山とそを化はれぬ 山中の里 立元寺 持統天皇仍幸

宮路山

貝原五音路記云宮路山と今り只山中とのこむむり  
花開ありしとて云或云宮路山と今り只山中とのこむむり  
大綱りり道一山と高くべとんべり盛巻記小半宗盛と東関下向の  
大洲山宿とて宮路山と云或云宮路山と今り只山中とのこむむり  
大綱りり道一山と高くべとんべり盛巻記小半宗盛と東関下向の  
大洲山宿とて宮路山と云或云宮路山と今り只山中とのこむむり

家集

名よ一をんをまのうらまは山とそを化はれぬ 向けぬをまをま 射恒

十六夜日記

山はこゝろはれんむとてさうのちるあはれものなる二むうの山  
乃風ふせれあつたままこま本のれむ二村の山  
あつたままこま本のれむ二村の山

ま本

あつたままこま本のれむ二村の山

ま本

あつたままこま本のれむ二村の山

ま本

あつたままこま本のれむ二村の山

ま本

あつたままこま本のれむ二村の山

ま本

あつたままこま本のれむ二村の山

ま本

あつたままこま本のれむ二村の山



け山までいむり〜

はちろるむり〜

山の裾登小峠のある所〜

東鑑曰〜

二村山法藏寺

本尊阿彌陀佛

其證夢〜

怪藏領守あり〜

御由にて〜

一衣をふ〜

さへはる〜

赤坂

ま本

紀り

赤坂と安はる里〜

宮後山〜

定元〜

ゆよひ〜

ワラ〜

大江山〜

名沢〜

大か〜

の秋芳〜

妻を〜

菩薩の化現〜

るれ果の若〜

い〜



茶臼音也脱登  
 高柳や  
 赤人君の  
 州の林  
 蕪村

洛東大雅堂  
 餘夙夜



本野原富士

小糸平 藤時  
 本野原の道標  
 多くはこれ  
 たり 見ゆら  
 紀りふこれ  
 と賞とく  
 調子且乃  
 耳堂五七此  
 せんをさる  
 されらる



賢名如雪  
 雪飄明厚  
 問暫聽天  
 下論符氏  
 夙棟王猛  
 許何滋異  
 日定中原  
 右懸山道危亭  
 應聘之西  
 熊尚之



甲子如大寺  
 大徳寺高僧  
 時信少少  
 茅廬之願  
 て天の安老  
 を福と

三州  
 牛久保  
 山平勘助  
 故居

清福堂





祭神菟上王

古事記云開化天皇條下大股王之菟上王  
者比賣臣君之祖社説云祭神兔上王白

鳳年中依神告併祀八幡宮祭式射取雀十二羽爲祭牲  
三代實録云貞觀六年二月授參河國正六位上兔足

神從五位下  
鐘銘云參河國宝飯郡渡津鄉免足大明神洪鐘  
右爲志者天長地久仰願圓滿國上安穩諸人快樂所  
奉鑄也

大工藤原助久  
勸進聖見阿弥陀佛  
檀那朝阿弥陀佛

應安三年庚戌十一月

此所の村老云此所は陸奥の東方土中より湧出に其遺蹟方五間許の地  
今より有り在衛佐松尾恒連ヲ云

山本勘奴故居

室飲郡小坂井の東牛久保村あり今第跡田圃あり  
牛久保の長谷寺小勘奴の守伴摩利支天の小像安座に

いへり申州源氏武田家軍師之初は郷小棲で躬龍畝小耕しある所列國小  
深流して専軍學と假す又又文地理と曉し韃靼諸國胸中に八陣と

畫て天下安危を解所を觀ては牛久保を蟄し其以天下廿四將の其一甲州の  
大守武田大膳大晴信難後駕と狂ふを顧る事三つびよ及ひ

人と辱して箕箒を好む事日々小蜜の家は遠山石鳥助坂恒信賢等後を

晴信曰われ小勘奴ありと奥小水ありと再ひ言復は事ありと室ひ

際小出陣ありと日教僅小十五日の間信州を放く九嶽を臨みあれは軍師の

計策小據し成人云和朝の外龍明劉基也此世人其履名爲竹中重治

穴山梅雪真田幸村をい山本が門ふとや堂へ

砥鹿神社 寶飲郡 諸書一飲と假す  
一宮村あり延喜式内峯の社と奉宣と稱ひ

祭神大物主命 風土記所祭大物主神主田五十三東  
文武天皇元年始奉圭田加神禮

文德實録云嘉祥三年秋七月丙子朔授三河國  
砥鹿神從五位下仁壽元年冬十月己巳進參河

國知立砥鹿兩神階並加從五位上  
三代實録云貞觀十二年八月授砥鹿神正五位

上貞觀十八年六月授從四位上  
社説云祭神大物主神大日貴命大物主神

社説云祭神大日貴命大物主神大日貴命大物主神  
御煙藏山風不助使の時神荒有て公宣卿とてつて此社の神とまつ

例今月の神主草鹿砥鹿氏に公宣卿の遺裔とす  
例今五月四日走馬流鏡馬の形ありい本宮藏東石巻社

西之儀投社奉母の里南又大洋藏とす  
依はつらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

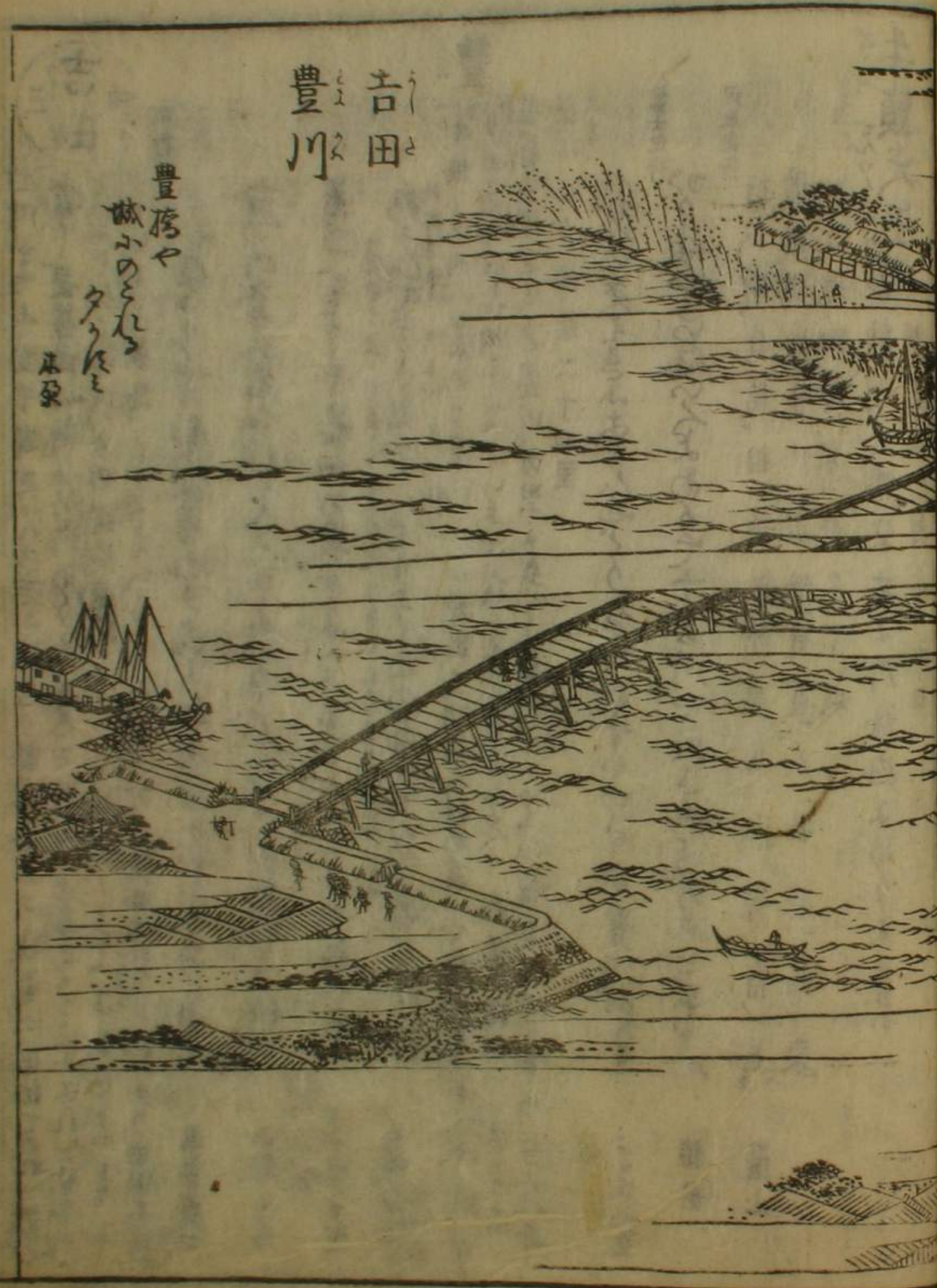
まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ

まのめゆらんともなりなり江のめみののまのめ



吉田  
豊川

豊彦や  
城下のとら  
タウバ  
本原



石巻

石巻







煙巖山鳳來寺勝岳院

三州設樂郡門谷村の山麓あり  
天台真言の二派あり

本尊藥師佛

長き寸八歩爾基利修仙人一乃三體の他日光月三  
十二神將四天王と安んず

神祖御宮

諸堂の上方あり  
別當職天台學頭松高院

拾き  
このやふさうの櫻は色をいへ人の困ふもついでなり

紀武正  
このやふさうの櫻は色をいへ人の困ふもついでなり

送爽 旭子 方三河 函関 倉海波 物茂卿  
惟君 奉使 向三河 路入 函関 倉海波 物茂卿  
吹笙 幾訪 寒芳州 歌芙蓉 峰巒 白雲多  
聞說 登臨 名蹟 偏高山 少室 足如何

鎮守三社権現

中央熊野権現 左山王地主権現 右白山権現  
利修仙人の弟子心月坊祐仙 勸請

六所護法神

利修仙人百餘人 因茲勸請  
香華杯捧 蓮花 蓮花 蓮花 蓮花 蓮花 蓮花

開基利修仙人堂

この堂の飛彈の迹 蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹

常行堂

蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹 蓮花の迹

三層塔

源賴朝の建立 権原資朝の建立 権原資朝の建立 権原資朝の建立 権原資朝の建立 権原資朝の建立

鏡堂

護摩堂の傍あり 茶師の東方大圓鏡とあり 諸人の願より  
鏡堂の由縁あり 八幡宮 伊勢兩大神宮 辨賊天祠 天神祠

鐘樓 樓門

鐘樓の傍あり 樓門の傍あり 樓門の傍あり 樓門の傍あり 樓門の傍あり 樓門の傍あり

名跡題目石

藤原氏建つたれと弘法大師の投書と 松高院の  
八王子祠 生土神あり 妙法龍 下あり

奥院

白山権現 不動尊あり 六本杉 奥院の路傍

煙巖山

本堂の西にあり 此所の利修仙人 護摩を修むる煙あり  
勝岳院 本堂に乾小當り 利修仙人の住居と 簫の籟あり 簫の籟あり 簫の籟あり 簫の籟あり 簫の籟あり 簫の籟あり

瑠璃山

奥院の傍あり 瑠璃の壺あり 瑠璃の壺あり 瑠璃の壺あり 瑠璃の壺あり 瑠璃の壺あり 瑠璃の壺あり

隠水

西谷にあり 利修仙人の加持水と 早天霖雨と 増成あり

高座石。巫女石。俱本堂より乾の方より利修仙人山神の招請

巫女天降りて聽聞し仙人説法しゆふ所と志座石といひ巫女

尼行道。仙人居りて女人と汚穢の身を全げくふあらずと

行者帰。當山の嶺より林の方大聖(行道)役行者登山の時岩路峻く

縁谷。南の方小高き山に海濱邊山の本を茶師伴と云信し

山伏堂。馬背。本鼻。俱山より

又高山の推古天皇ハ勅願ふして利修仙人の開創之其以上宮を子

攝政の時三河の國を奉りて日桐生山は桐樹あり相傳神代より

虚洞小棲其西の枝小異を棲す其尺八咫尾の尺丈筋全身五彩金翠小

して啼聲雪々しくくまき其名とあふ番二日三尾羽と落れ故ふれば

猷も又其洞中は併像あり金やあふ土本を非び持ち寶壺と持して

金更ありと奏ひち子これ以國早されい風毛の尾は名支徳と好む今あふ

蓋階下神皇の紀と關に儒佛の道以弘むの表表之彼佛像の瑠璃光佛より

後代龍去く精舎と殿を同希此法字を蒙りて利修仙金高七本指以

一枚代て茶師日月光十二神將四大天王と彫并一巖上小安坐巫女今たを

是之皇を驪馬驛で室中と馳のふ跡のあふあり是之河國遊樂の峯と

ち子傳あり故に茶師と移り殿后文武天皇御心の御系鹿破八倉長

と勅使して仙人と良の利修仙再三辭のふも勅命通れりて香内

ありて加持となりられい御心忽平愈れりせり其時天皇仙人の意願と

勅問ありらるに言て云烟霧と掃き青き衣を松實と服して名刺と

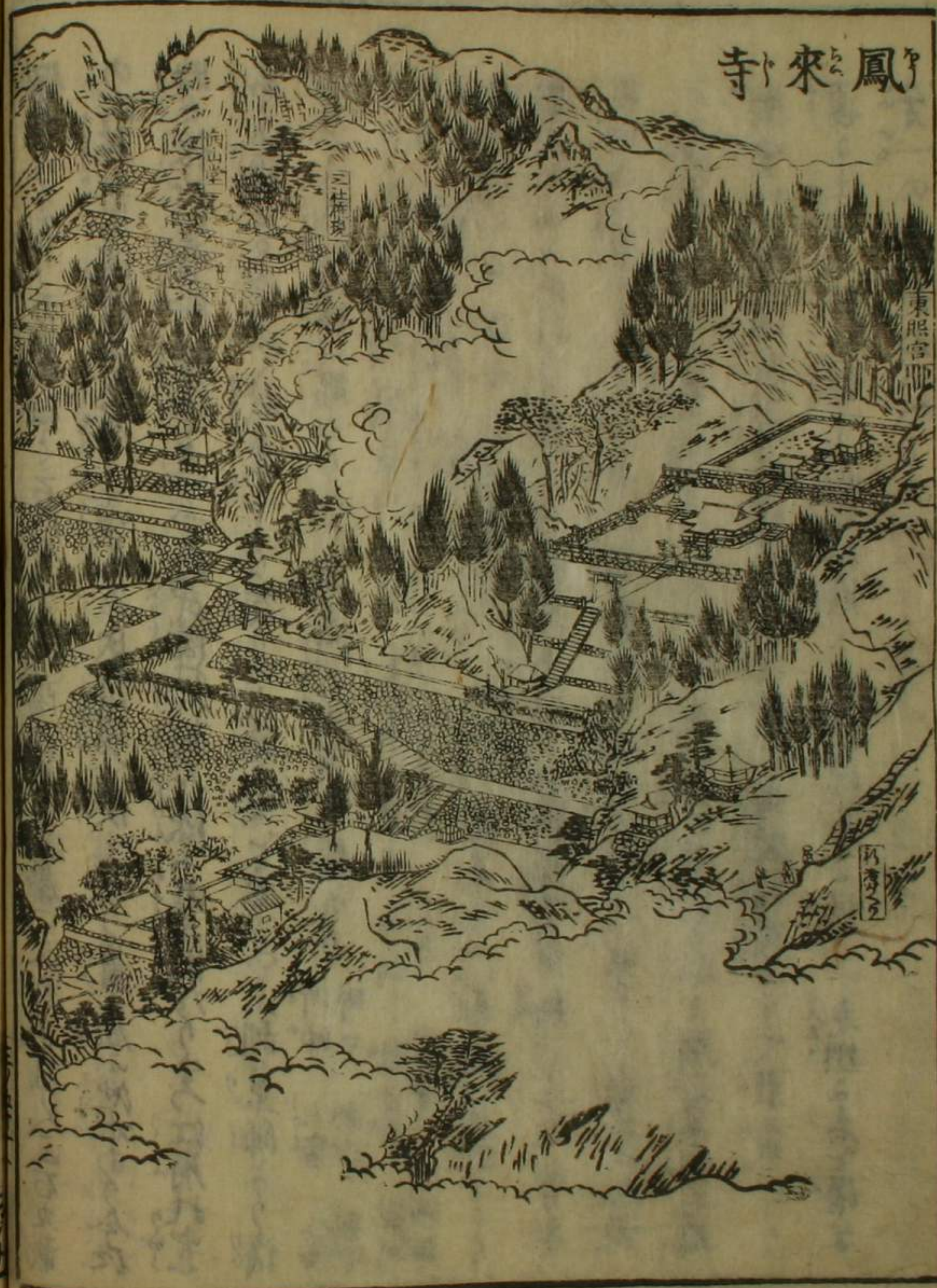
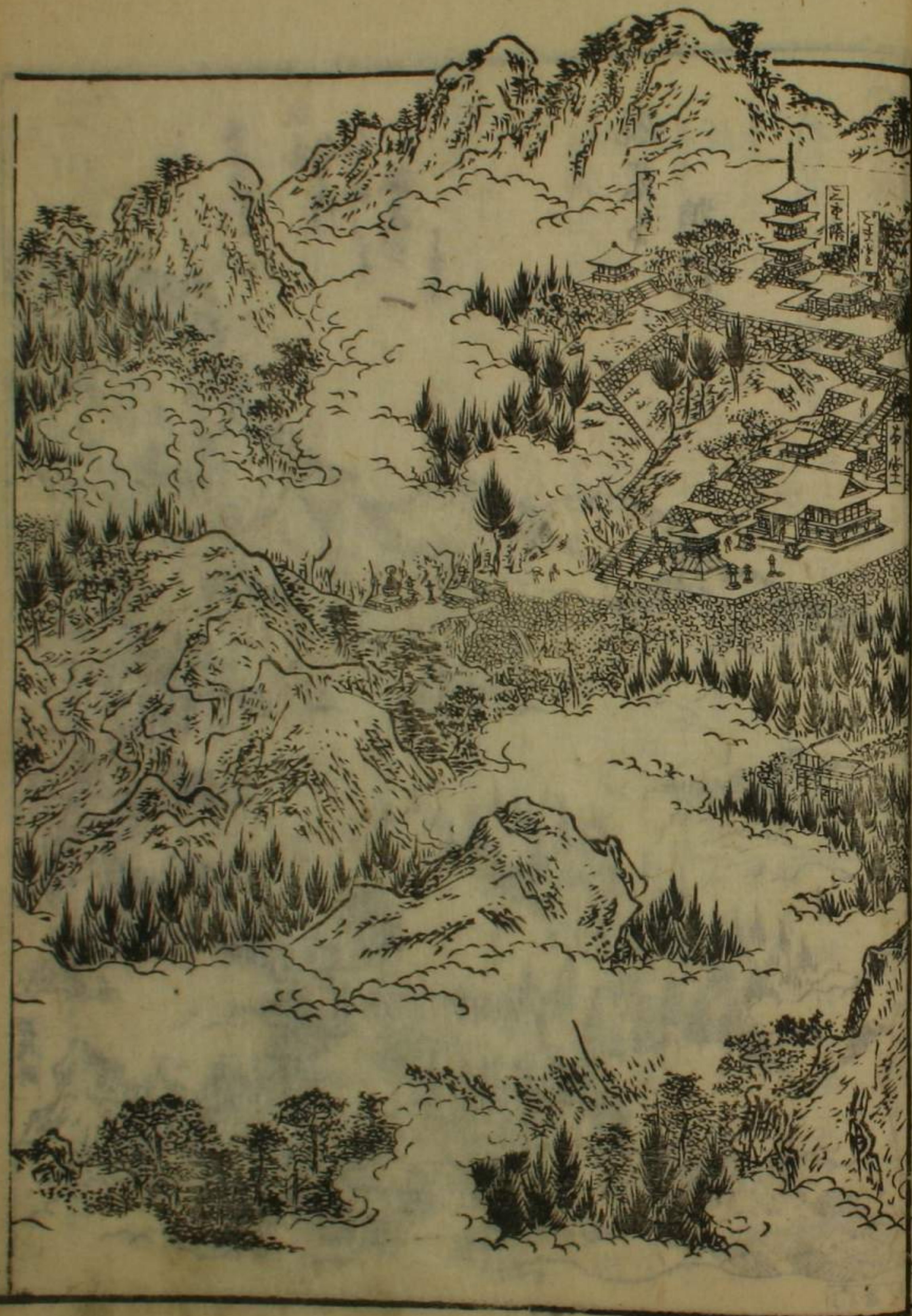
親まされい身まきての願心も國安泰の御縁よりて併堂を建て尊叙

と安置せし事あり本來此願を以て奏し之れを感得りて今三年造匠其後  
光明皇后は御養にて風來寺此願を賜て青赤黒の三鬼ありて常小利修仙ふ  
隨從せり仙人入定の時三鬼の首を茶師堂の下に埋て高山乃守護神とて  
元和年中本堂炎上の後遂に折朽石櫃よりふれ出づ高山の僧僧初て  
三鬼首とてなるを又えのや封して藏り埋しとて宿昔利修仙への封へ  
勅使公宣卿登山の折り本宮嶽(昇り)其時老翁形れ導引して勅使  
浜山(送り)ふ公宣卿御あま

五務や海山のまのこいほふ似く浪のこきげは松風の音

本宮嶽の神傳もいふ事と記さる毎山月二日十四日若菜樂と祝ひ獅子舞  
田樂修正會節捧汲振もいふ鬼の由縁とて并開山利修仙人原山城園二葉  
里賀長同賀都岐麻呂の子也 欽明天皇紀三十二年庚寅四月七日小誕利修  
童子と号く成長の後忽然とて山嶺より爰中に五疊山の長狀仙人  
ふ謂く千歳のまを授けりゆふ其峯は千壽峯と號其後万壽峯

保ちんるより万壽峯と云所今あり 陽成帝元慶二年利修仙人二百九載  
の附勝岳の深窟ふ入定し高本慈氏の出世と俟とてり巖窟ふ池水あり今に  
時々振鈴の音幽ふ夢ゆきとこれ武陵人桃花源ふ遊ふ似たりまろ江府此峯  
あふ消まのち多く秋葉山より登りて山路八里と登てまふ到る京師より清  
まろまの御油の驛此端より入り高山門ありて八里餘あり 野口 八幡  
篠田 大城 半田 長山 小岡 柿本 東上 中村 弥古屋 権現  
野田 新田 下井田 大見 銭亀 鳳來寺門ありて谷町とて  
瀧川 新田 退分 門谷 鳳來寺門ありて谷町とて  
能泊ありてそれより樓門ふふ石階登る事九町ありそ  
町毎石標ありて右より老杉翁齋とて祖の出る身造々り階展のあ側  
ふや僧房連りて天台直言の二流あり一念三千此諸法を祇胎金兩部の規  
磨會双具一吹才ふ光れ寶閣金塔神窟併龍玲瓏とて壯觀とてり  
直王王維が併と好し山水絶勝する清凉寺といひて春州は名を得る  
牙一の名刹なり





惣門

風来り  
秋着  
新雪  
旅宿

石巻神社 心谷郡神郷村ふのり吉田よりを里錦東山二川のゆき延喜式内  
例永正月十五日九月十一日

祭神大己貴命

所祭大己貴命也 齋明天皇元年乙卯始  
奉 圭田加神 禮有神家巫家云云 蓋此社平 文德實  
録云仁壽元年冬十月授冬河國石 繼神從五位下  
每歲正月十五日羊穀占の神事あり神あそび粥と煮く十八日の徳不  
齋の釜へ入其管の中穀粒の入るさゆあく其年諸穀の豊凶と占る  
穀占の神事内蔵内移泉の向ふもあそび内牧置神社移川橋上郡  
安藏社等々名高し

粥占もめてくくくく大根引

三男吉田  
本全

窟觀音

吉田より半里半東大岩村山向ふあり  
窟觀音 龜見山窟堂と号 禪宗

富二紀行 天長代をゆりもあしれぬさくれ石のみる大岩山と号す

吉田印

本尊千手觀音

行基の修長寺天長二年造立と云り初(山)窟の安ん  
堂内の額施無畏と書き寛政二年播州姫路酒井侯

大巖

堂後小あり高八丈幅七丈巖形魁小あり故山嶺  
喜捨 紅岩谷中より家進を

遠 紅岩谷中より家進を

二川

白濁 五ヶヶげろふふのあけのあもあれも三川のうちとそひ  
國をみりし里のふくあはれわりのあはれんるゆ

光彦卿  
徳全



遠州 二川の東にありて遠州の國邊

猿馬場 遠州の東にありて遠州の國邊にありて猿馬場の名あり

曙記

海道の松蔭をゆく 遠きせしふ東のふよりて富士の山は白く  
手まればふゆをさう山容をかくるも城はくわくわくしる

白砂の香いりしはゆぐりちるびくまをぬきてはふりしる

白須賀

荒井まきでき里にあり又白須賀とも書け須賀は東國の俗語に真砂の懸る  
所とて白須賀と書け一賀の脚をこね須賀は遠州の須賀もはれふ日トは  
初ハ波見坂の下ありえ縁年中津藩しつては所ハ後されし今も  
白須賀といふ所あり

白洲賀

今もさういふ所あり白洲賀といふ所あり

松のげのり海にけて白雲のみを別れし出る紅人

九條前大臣

波見坂

白雲の東の及路坂の下に下倉海といふ所あり波見坂の松あり  
遠州七十五里の大津藩にありて波見坂といふ所あり

富士見松 波見坂の松ありて富士見松といふ所あり

富士見松

潮見坂に吹けりて波見坂といふ所の浪は花やあらん

日

今もさういふ所あり

日

言れりしは波見坂といふ所の浪は花やあらん

丙辰紀行

天地豈識幾層欄 舒卷古今方寸端

又 波浪雲天俱一色 東南溟海更無山

羅山子

聖門有荷人 何敢潮見坂頭 停馬看

高師山

高志或ハ高石と書け遠江記云白雲より後おきし山名まじりのる依  
海道の懸る波見坂の中

新勅

手まれば波見坂の山をさきて高師の山の麓をみれば

積古

波見坂の山をさきて高師の山の麓をみれば

風雅

波見坂の山をさきて高師の山の麓をみれば

新千

波見坂の山をさきて高師の山の麓をみれば



新橋古

昔あきて日影の影もたたり山あふ海やささくゆらぎ

前中の記 雅房

新橋

淡路より赤あふれ高師山峯まで同一松風をそく

津守廻り

同

秋風より高師山峯の松風をそく

嚴達法師

二本

高師山を流るる松風の音をそく

氏部を為家

同

松風を流るる松風の音をそく

西行法師

同

松風を流るる松風の音をそく

慈鎮和尚

同

高師山松を流るる松風の音をそく

雅有

同

高師山松を流るる松風の音をそく

鳥家

東關紀行

冬河遠江の隈ふ高師の山と空ゆるり岸に松の影をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行

同

松を流るる松風の音をそく

源光行



舟をく渡名の橋はさへて年あつたれはる松のむま

定家

同

新さへ下りぬれもあつたる渡名は橋はたらのの夕ぐさ

後注拾

舟よりあつた(ゆかり)てのち大徳(ゆかり)のゆかり(ゆかり)とてま(ゆかり)たる

舟の渡名はさへて舟をくはてて渡名の橋はさへて

前定将頼朝

十二夜日記

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟のせもつる舟はさへて舟をくはさへて

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

河井

舟の記

橋本とつる舟はさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟一南の海湖あり渡舟はさへて舟をくはさへて

つる舟はさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

舟集

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

泰藤推経

舟本

舟は島高原の渡はさへて舟をくはさへて

権絶言良房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

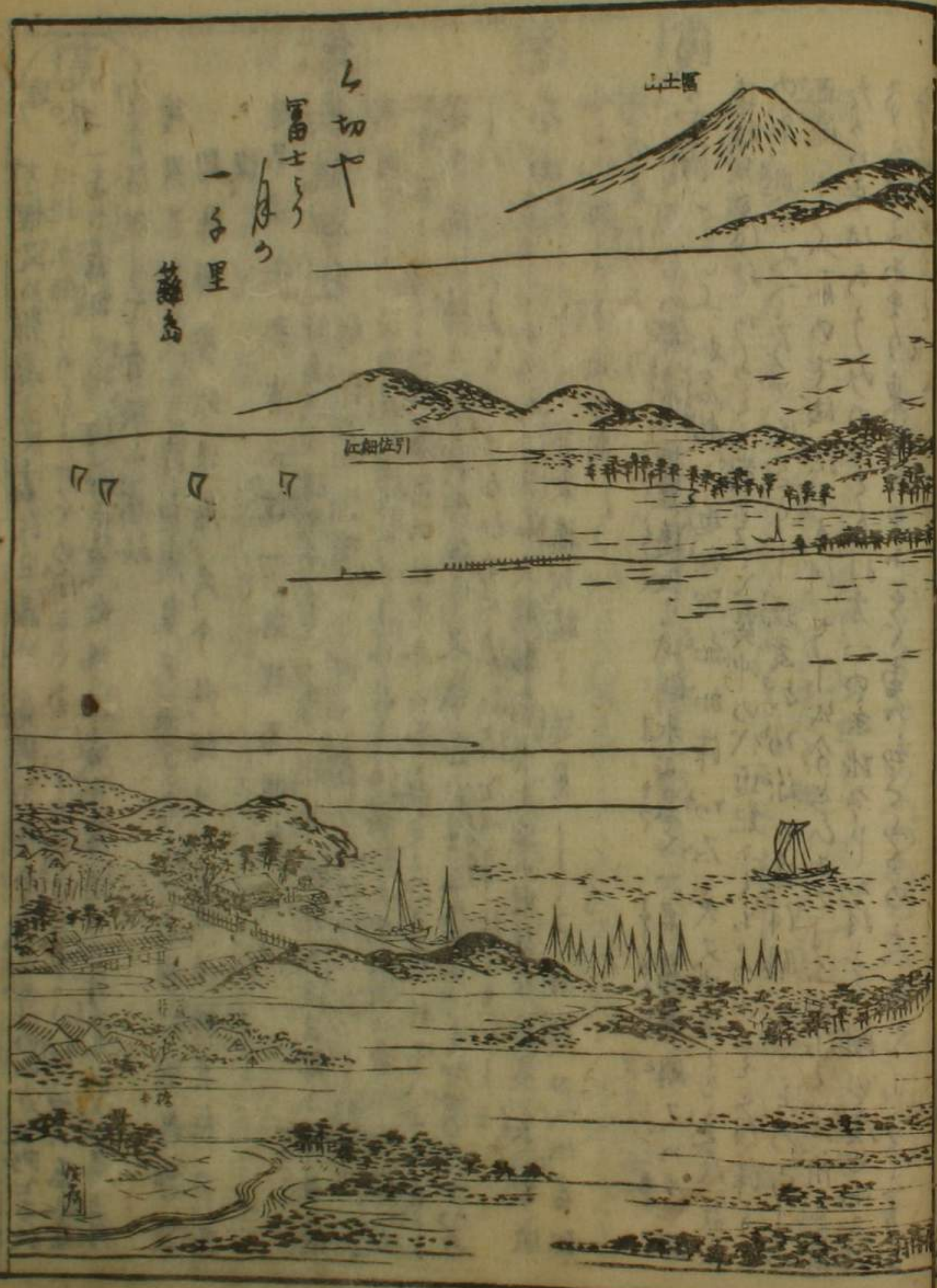
大藏公房

舟

舟をくはさへて舟をくはさへて舟をくはさへて

大藏公房





ふ切や  
富士山  
一千里  
藤島



今  
四

表集  
たつた  
海と川と  
舟と橋と  
松のし  
雅經

荒井

荒井 又の郡名とて古く旧名猪鼻驛大畧今の荒井の北方坂と云ふ  
は地味師より河内守の向ふくありて荒井の意竟之是よりは府の東に  
ありて海に接する海に上り里船場小都御樓あり 此の東の人より  
後船して荒井小都御樓

猪鼻湖神社

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
猪鼻湖の神ありて八王子社と云ふは神代卷に云ふは猪鼻湖の上  
に猪鼻湖の神ありて八王子社と云ふは神代卷に云ふは猪鼻湖の上

源太山

源太山 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
源太山 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

濱名湖

濱名湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
濱名湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

日本書紀云 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

ひの

ひの 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
ひの 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

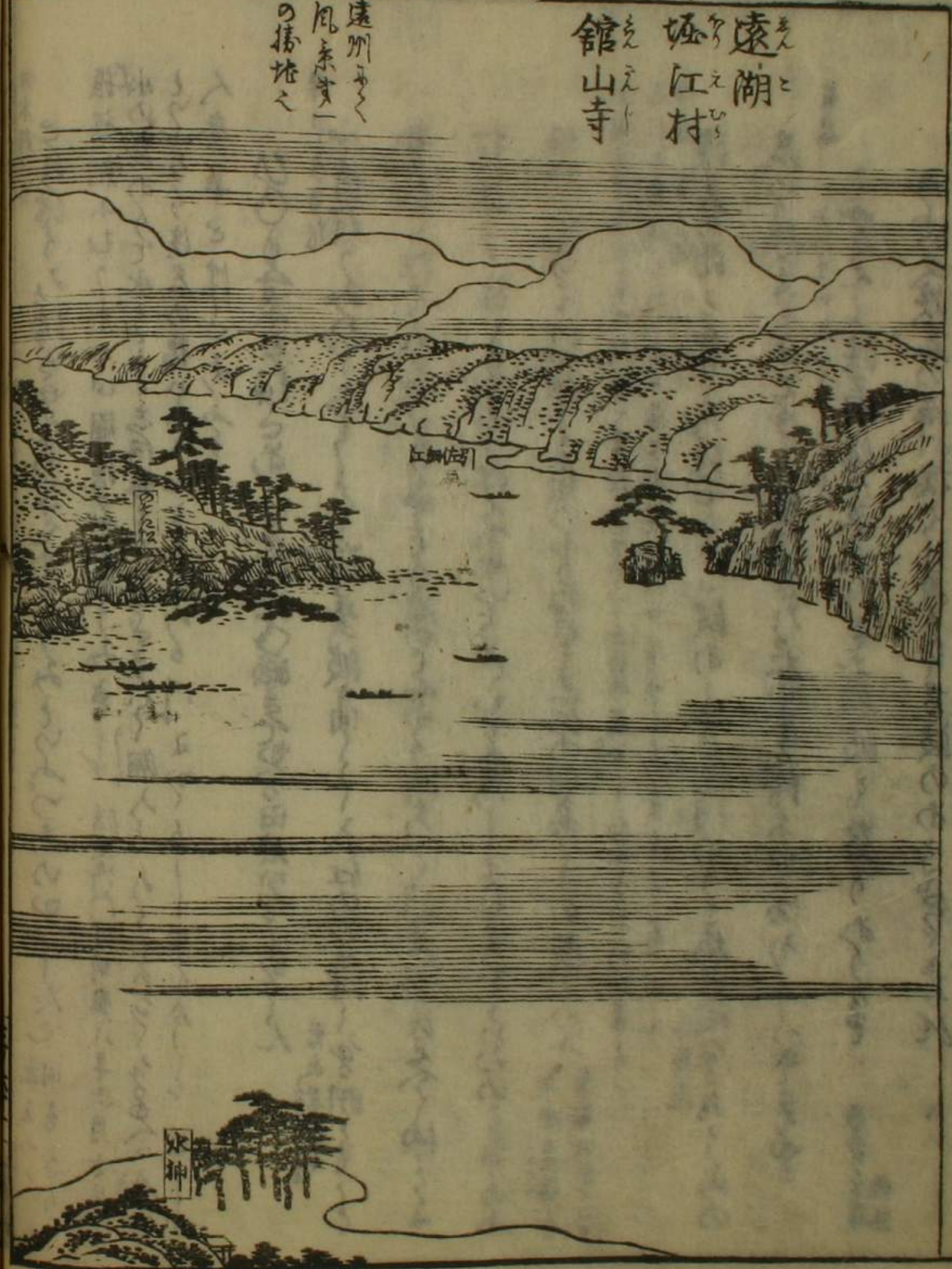
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖

延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖  
延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖 延喜式内 猪鼻湖



遠州の  
風景の  
挿絵

遠湖  
江村  
館山寺

寶樹の菴

赤巖



江柄印值

橋本谷の橋のつらより行々たりたりとれを跡まきくを乃夢いせん

るびりかみせしゆふま松の枝のむむとす地城引とむいよりいせせ

湖上遙ふうつんとくまの志いおの顔お老う西ふのそそ六湖海をく

そびりてま雲の浮き風の手くこにけいおつのもうたのやまも是も

おろぐれとも湖海の淡鹹い氣味こそけり

高師山ま末てをれを淡松の一毛遠死海の入海 愛融

むうい舞沢のやとより淡名の橋まてふはけくみとりの松生けりありありみ  
海とをうてく中ふ一海の大路ありとるへう古老の松ま云むうい橋をれ東福寺  
たり本履きて舞沢の町へ齊まひとらとらり神仙傳ふつる東海れ云ふ  
幸田のり半張るるといふあつりの事一あつる  
今切後土御門院所宇明應八年六月十日大地震一湖と潮のあせ  
後拍原院所宇永正七年八月廿七日漂の貝歩山崩川埋れ舞  
坂の原破り流とる又其後元禄年中地衣津渡ありて海上  
あうく風強くして波高く渡船の災とあれを室永年中官政より  
有司末り今切の渡船と校方の杭を折く逆流とせと先又  
舞坂の方よりたへ海中半道の向渡戸を築さく渡船の風  
波と標よりゆき、孤とめい自由あり  
遠州荒井の渡り奥の山五里をうり海とありく大船も出今身びり





引佐細江

引佐細江 所を右の記より古跡多し

東紀行

富士紀行

引佐細江の文をばくしふくむるもなきなり

清浦

光彦

宗長親王

引佐細江の記より古跡多し... 引佐細江の記より古跡多し... 引佐細江の記より古跡多し...

引佐細江の記より古跡多し... 引佐細江の記より古跡多し... 引佐細江の記より古跡多し...

引佐細江の記より古跡多し... 引佐細江の記より古跡多し... 引佐細江の記より古跡多し...







松と人



永享四年九月  
將軍足利義教  
西土佐入会  
權大膳都亮孝  
あし百つれ  
道の起まを  
と詠一の上遠州  
引馬野の松林  
あく宮瓜僮  
興に奈のゆ  
あれより松の  
ほいさへんこと  
佩もいふ縁  
今に細々松と



石田夏行画

諏訪明神社 漢松あり初は國上中津の松原鎮坐あり弘法二年  
七月神詔よりく所故大に先驛路の鎮坐遷久

祭神 健御名方命 八坂刀賣命 社説云信州諏方郡南方刀美神同躰

五社明神社 同所あり初は國士久留依波守の末子我中ち武術能  
鳥居御供所山王社御祈禱所嚴重うく壯麗なる社頭也

祭神 武甕槌命 經津主命 天津兒屋根命 振大神 太玉命 多玉命  
浦翼命 又或云往古より此地に太玉命の神社ありこれに春日

光海靈神碑銘 此の實は真淵の權也一七為社神主蓋承暉昌の碑之  
遠 津 淡海引馬縣 坐 五 大神社之神主從五位  
下藤原森朝臣 負外民部少輔懸 此朝臣初冠  
而嗣父朝臣之家其家世々傳神道復受荷田宿祢大

人之誨也日獻嚴擗嚴幣白太諄詞奏神遊許多  
事悉依上世而其儀雖他大祠 有不及是朝臣功  
之一也夫此大神 奉爾東都 乃二御世 鎮天下  
賜御軍大君始生引馬城故為御產靈 大神也下大  
命千尋榜網打延天津真量 量成宮柱太繁垂椽  
高知 奉齋賜 雖然積年天御蔭將壞朝臣恐  
畏 恭向東都訟申憂申 始于元祿十七年 七  
十餘度 享保十二年七月給黃金而令修造其經  
營多年而修成如故延享二年九月以古式奉遷宮  
竟是朝臣大功之二也朝臣家本在市中 每齋事  
不便雖欲移於社下之丘其地有甚科峨引五百  
磐 為垣累八百 都土 得成 遂作出居則坐觀富目  
嶺之夏日 乃雪時人羨彌長復大人矣是朝臣功之

而嗣父朝臣之家其家世々傳神道復受荷田宿祢大

三也。朝臣貌猷雅有大度。内懷古質。外長顯事。即有神道者也。又多能雜伎。揚他之能。平生之意如此矣。至曆二年六月十四日。朝臣年六十八。患卒。哀戚者及遠。因葬其社之背面。清水谷神祇大副十部朝臣。益光海靈神。訓云。宇那提理通。是擬所作。国奇。龜之功也。真淵因本貫国。少時受訓。如父悲慕。奈止哉。其嗣。乃朝臣為壽。并其妻繁子。亦於予善。故需墓誌。且備故人。其人也。宜以皇朝之言。敢不可默。徒見所。有事而勒焉。即驗。備騰保門。阿不珉。烏奈昆。氏羅斯。引。預例。屢之。遷哆麼。登室。畿與爾。寧鳴。呵哦。佐無刀。預例。屢之。遷哆麼。

明和四年五月

賀茂 岡部 真淵 撰

三方原

三方原 牧場多とのて三方の原と云ふなり和村統田村が田村二箇の

折元寺 三平神毎月甲州の太才大膳大支晴信入道信玄甲斐とあり

當國秋葉山より白り多々良飯田の志城と攻取 伏見 大野

犀ヶ崖

犀ヶ崖 三方の原と云ふなり和村統田村が田村二箇の

大安寺

大安寺 淡ね看明あり 禪宗曹洞む 大度ハ 續日本紀延

行龕山龍禪寺

行龕山龍禪寺 高野山寶性院の末派

奉真觀世音

奉真觀世音 大同元年海沖より出現其の 諸堂建立後天正

大師堂

大師堂 終堂 鐘樓 金併比藏 水神祠 攝待所 等併殿の

寶聚坊

寶聚坊 行泉坊 等ありてはの 大刹也

近衛龍山公殘亭

近衛龍山公殘亭 為寺金光院あり 近衛龍山白晴公又龍山公を

楓々松

楓々松 曳駒捨遺云 口村の田圃の神は 楓々あり 一株あり 下向の時



下中ノ松林の臺とてんを祀る酒造りあり名附初一ありこれを  
龍も聖も酒造りありこれ松林の龍聖言も龍聖言ありは松の事  
龍の聖の造りあり松林の龍聖言も龍聖言ありは松の事  
龍の聖の造りあり松林の龍聖言も龍聖言ありは松の事

青林山頭陀寺 高野山法性院の末派也  
本尊薬師佛 行基菩薩の他一統毘首羯磨の他も有り  
文武天皇 大宝三年草創

阿彌陀堂 文六の松林と安次 二層塔 大日如来  
二王門 執金剛神 運慶の作

勅額頭陀寺 遠州頭陀寺 預於定額  
本尊不動明王 永祿五年八月二日壬戌以

護摩堂 圓成院 安養院 東光院 成就院 住古坊舎教多し今六坊存  
植松原 松林の在松林村の室町將軍富士見下向の時  
亮孝信正の券也

蒲神明 神籠村あり三代實録云貞觀十六年四月十一日授遠江  
正六位上蒲太神白伊大刀自神並從五位下云云 神主蒲

茅場 行住十二里半并  
京江古人行徑同里 町屋村と云又神之町とも云く  
又龍川の西端也

大龍川 川幅十町并二瀬の二流と云る船位一と云る源也  
信州 龍

天龍寺 劫の湖と云る未と備と注く其所と云る龍  
寺といはれり又龍寺といはれり

心なせーらみはせざる舟たぐ一つやうに舟くれ人の往來さー  
心なせざる舟たぐ一つやうに舟くれ人の往來さー

舟の泡のうらみおつる夜とてんを祀る舟小舟も亦あり  
舟の泡のうらみおつる夜とてんを祀る舟小舟も亦あり

みるはり来るく船の去と速をまはせ還乃旅人をもまへ向ひの舟  
みるはり来るく船の去と速をまはせ還乃旅人をもまへ向ひの舟

着るはりい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水  
着るはりい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水

さくはりせらるるい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水  
さくはりせらるるい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水

なるさ方あるはらざる舟のけりさくはりせらるるい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水  
なるさ方あるはらざる舟のけりさくはりせらるるい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水

い川のさくはりせらるるい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水  
い川のさくはりせらるるい川のさく川と船もぐひ多りと安んずるの巫女の水

光り

光り

光り

光り

光り

光り

光り

光り

光り

天龍川



石田 天行

船田入道 杖方將  
新田義貞 飛越  
天龍川 絶橋



されを之竜川のるがれお落々として驚波龍門ふ下其の死はひわり晋  
け重耳と壁に投じ槎に浮へし星斗小近き又呉よりむり一連成の丸ふ  
新田元中将義貞東園の軍に制しつて歸りせしれし中流を平記ふ  
あるして之龍川の東北宿小着のひ俄小在家に壊し浮橋をせ渡され  
る諸軍みまろし一男く後舟田入道と大将義貞朝臣と二人橋取  
りつるひつるふいふ敵心者多うらん浮橋一面張繩切て捨り  
る舎人馬次牽て渡りる馬と老倒小落入浮ぬ沈ぬれたる瓜栗生  
左清の遣着あが川中へ飛入二町をり遊ばはて馬と舎人と左右  
めふさう上肩に起るおの雇に静小歩て向の岩へ着りりる馬に  
落入る附橋一面をり落く渡るるも毎もらん舟田入道と大将  
と二人ひつるをゆりつと飛渡りゆ其跡は候る共二十餘人飛りゆ  
着く餘個一るは伊賀國の住人名張八郎と名譽の大力れりるが  
後して取せんとて鎧武者の上巻を取て宙を引さげ二十人中へお投被れり  
或人残る有るは右の脇に腰をこし狭く一丈餘落る橋のゆりつと  
飛ぐ向の橋桁に踏るる踏所せしと動くは越小渡げあらんれは諸軍勢  
遙小されは見であるありしれれ凡々の態小形は大将といひの者老  
といひづれは捨つとも覺はれぬも時の運は軍小お負ひひつる  
うしてさうと云ぬ人さあがりなれと起し又梅松論小義貞又龍小  
橋のけさお渡りて後林で敵小向小勢を川と後小高て戦ふる退  
はどら六輪の謀めて橋と切れ武略のひ庭をり敵もも越く渡り  
橋切落して敵も志は獲られしと周章ふとめ死する云とん事  
口惜のるべし橋を堅固せしめて渡られし事なるとんこれ  
らと考ふるは義貞の武畧の人ふして関羽の賢豪小張飛の雄力と  
兼つる 後醍醐帝の運運やばらなりあらん遂にや  
新田楠の豪傑魁しし亡びぬる事もみまられえの  
る勢つ所ととられたる

銀闕玉樓  
帶晚霞情  
春舞袖獨  
堪嗟何謀  
為得新恩  
寵無奈東  
方及落花

笑山



平重衡口  
西海の合戦ふ  
おまけのうた  
あまく謙倉へ  
下りゆくた  
此の国の家  
治りゆく  
侍徒  
飛べしれ  
あひあひ  
琴の弾き  
うたふと慰  
梶未正三  
倭ふあや  
眼とひた  
苦みえせ  
あま  
悪  
凡俗



春泉画

池田宿

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

富士紀行

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿

西辰紀行

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田、驛、長本、倡家、處子、嬋娟、天下、誇、腰似、楚王、宮裏、柳面、如、巫女、廟前、花、古今、不盡、洪河、水、淵、瀨、相、移、兩岸、沙、治、乱、興、亡、非、我、事、征、鞍、暫、憇、馬、嘗、茶

羅山

重衡海道下

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

池田宿の里は古くは古人の紀行多し池田宿の里は古くは古人の紀行多し

といふ名を仕置賜と給ふありてさうりひひ海道の英人少く  
申す都立出く日救経ねれを延生の半さくまも既小暮れん遠山  
の花の強の香やとんえく浦々清々露渡り幾方乃末の事どもに  
さひはあゆふあもささいさうる宿業れ方見さうと宣うて  
は死せぬとのを候なり

築野侍従古蹟 沈田の宿攝取山行興寺といふ時宗の梵刹沈田に  
者築野が古蹟なり本寺あり基の他の阿蘇陀とあり

池田宿 舊天龍上湯谷墳 残林藪中 山壽開齊  
可憫宗盛 濁聲色汚名濁水 共相從

熊野墳 本堂の側あり紫石の塔婆  
建久九年五月三日没す

同老母墳 同所あり根鏡石の塔婆  
建久元年四月三日没すと傳ふ

侍女葬墳 近隣あり村あり沈田宿あり  
南き里許に

されと沈田の長といふる今これ本陣宿のや一仁安の頃ひ長者子  
るを以て築野権現といひて行りたるは一女子以備く其名筑野  
と名付三五の衆也とあり一の其風俗宿龍とくま髪花顔一

笑ふ金の侍も今いむりありて鬼火やまぶれまき枯體朝

あゝ小睡く秋葉墓畔小庵一茶窓の二二化の上人真教

困りくけ時きに泊る築野喜提と弔ひ後次流のちきあれと池

田道場よもあそど 此の什室小滝川氏の書れ一築野の孫れ傳あり  
又築野流傳を土佐風あり古推し

中泉 沈田のあり一を里給ありむりの舞は所遠州の團扇といふ

八幡宮 堀根村あり石清水次坊住して社頭社兼堀内殿

櫻ヶ池 中泉よりありの方を里許あり相傳源皇阿闍梨沈田水へ  
中願をある者強被と稱入沈田中一授此時正の朝五つ時あり

其強飯るさと願を成すのちり又強飯其まきあり

沈ひまき一なる久又沈水ふ夏日遊戯とむり

傳ふ云む一比叡山肥後の阿闍梨源皇といふ加藤三塔無双の學

者之黒谷法然上人の師ふして源の字は賜源空とも名乗るふ源皇

阿闍梨はくく業はる不併道の淵を我一の修仍さる悟る事あり

弥勒れ出せ候く三會は曉と期をべ一これをも身不令保龍身よ

とくあり 於是才子等以諸國小下 龍其棲所とんせりゆに東國使使者  
並其の註記とつる僧歸り來て申す 遠江國美原莊に櫻が池といふ  
ありありの蒼海海洋々として少の青山峩々たり其間小池水が湛々淵底  
限あり且其澄みして龍地の棲むは蓋池を希け所の徳寺實定卿に  
所領こと申す河内國梨のれを夢く徳寺の我權執に毎う候めんとて  
使とのり申すけ或後夜禪して一池の水を掌の中お握り雨風忽ち  
雲小糸して遠江松池小到り入定しめはなれを波瀾とさきとて驟雨車  
壯のゆく雷電霹靂として村邑動揺其後源空上人は國を赴きけ池  
頭小流の師を別とて嘆じ恩謝の為孫陀徑を編し姓名念併しめを  
法回しとて大慈の形と成れ池上頭と揚て落涙の体は源空上人も若ふ  
涙と流し師を別とて嘆じ恩謝の為孫陀徑を編し姓名念併しめを  
めば龍身を去て源皇河内國梨と成り少小教方其末の所物信り  
まじり又勝の下めぞ入めんとて云傳り

或土俗回て云法然上人は浄土一宗は元祖にして宗風海内を充滿せり今も百  
餘年た後にも貴賤かの教をうけて浄土往生の法定を源皇河内國梨の併  
道修の師の畜身と成て苦惱し水く之會は曉の待の其難行とさめ  
て躬身成佛の勸をあらざるも空しく龍體小對話してゆくれめつらふ  
對て云佛道小大衆小糸りり小糸小縁覺聲聞の二教あり縁覺は十二  
因縁と觀して得道の聲聞の四諦と觀して得道の河内國梨の法縁に  
基く大衆教ふしての成佛の因なりと目を流りて姑龍身に依て龍委之  
會は曉のまのこれと般若獨覺行の法婆沙論俱舍論成實論四教儀  
等小糸りり又の國梨の智識たる事凡愚のあなとふあは法然上人  
發の嫌ひのふ非は修行の成難と察して末の様と鑑く弘通のふ  
浄土門に兩師俱く權化の再來をた是俗の身とく龍體小糸りり  
龍傍とくふあはは慈惠僧正の法不魔界ふ入く生と度とるは誓願あり  
慈誓大師と名隱山の九頭の竜と現す弘法大師の真言秘教とのりて





遠州 櫻池



良嶽の源皇の御孫  
 龍身奉るの時は  
 信々龍身成り  
 遠州櫻池に入定  
 法然上人  
 師恩を報せん  
 今到り龍身  
 答わす御孫  
 師共推化の  
 再入る人  
 ねんが鳴る半  
 ふれ



遠州香泉寺四

志留波様  
土人志ろはと  
久



三十八

万葉 山名郡文部  
等倍多保美  
志留波乃伊宗等  
雨利乃手良等  
安比豆之乃良等  
己等母加由波牟

之の浦に流るる  
國ありあつと  
おのりては古代の  
風積あふ人



妙星寺 香道村あり 時運宗 観音山と号し 宗祖 日蓮上人の父 實名

名産花菱 香道村の名産 花菱 花菱 花菱

腹川脊川 香道部の東あり 山崎川 妻の末より 小結と云ふ

名産 又腹川村 脊川村あり 雅彦

志る波儀 藤原郡 藤原郡 相良の岡あり 白羽村の神 形明神の祠也

社説云 祭神 天火命 出見 豊玉姫 玉依姫の三座 安永元年十二月十五日

鎮座 中上社 願燈明堂あり 後海船の棧 大井川 小辺

仲は船の向をり 船の向をり 船の向をり 船の向をり

東海道名所圖會卷之三

真例

